

# TSフリードの非日常

ミスター超合金

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その日、兵藤一誠は白髪少女に恋をした。運命的な一目惚れは同時に異形への扉でもあった。彼はどこに向かうのか……………

この物語はラブ×シリアス×TSです。苦手な方はブラウザバックを推奨致します

▼2016年3月10日、完結しました▼

# 目次

旧校舎のディアボロス

l i f e .	1	曙光	1
l i f e .	2	無知	8
l i f e .	3	変貌	13
l i f e .	4	処刑	19
l i f e .	5	再現	25
l i f e .	6	歓声	32
l i f e .	7	背中	37
l i f e .	8	成立	48
l i f e .	9	鱗	55
l i f e .	10	所有	62
l i f e .	11	役割	68

l i f e .	12	視界	76
l i f e .	13	涙	82
l i f e .	14	体温	90
l i f e .	15	兵士	97
l i f e .	16	憤怒	105
l i f e .	17	最期	111
l i f e .	18	祝福	118
l i f e .	19	幕	125
l i f e .	20	真相	131



## 旧校舎のディアボロス

## l i f e . 1 曙光

高校二年生の平均的な下校時刻、午後五時。兵藤一誠は珍しく戸惑っていた。入学した時から通学路と定めている公園。その白い噴水前にて、倒れている人影を見付けたからだ。

だが彼が驚いている点は、人が倒れているという事自体では無く、その人影の容姿にあった。

白髪で色白な、整った顔。見馴れない白の制服は全身を隠しているようだ。胸の辺りが膨らんでいるのでほぼ間違いなく女性だろう。見たところは十五、六の少女だった。

「……あの、大丈夫ですか？」

その特異な外見から言葉が通じるか迷ったが、心の中でコスプレの類いだと納得させてから声を掛けた。初対面、それも相手は小柄な少女。

一歩間違えてしまえば通報されてしまう恐れもあった。にも関わらず声を掛けたのは心配だったからだ。

もしここで何事も無かったかのようにその場を後にして、死なれでもすれば一生後悔

し続ける事になる。

少しばかりの正義感と野次馬根性が、女性に免疫の無い一誠に勇気を振り絞らせたのだ。しゃがみこみ、顔を覗き込んだ事で影に邪魔をされず、初めてきちんと見る事が出来た。

「あ……っ」

好みのタイプだった。眼を瞑っているから細かい部分はまだ解らないが、前々から思っていた理想像と寸分違わず同じ顔をしていた。

自室の机の引き出しに大切に保管してあるスケッチと見比べても全員が同じだと言うだろう。鏡よりも正確だった。

胸の鼓動が一瞬だけ停止し、それから助走をつけてゆっくりと速くなる。五月蠅く音を掻き鳴らす胸に手を当て黙らせた。これではまるで野心があつて近付いたように見えてしまうと思つたからだ。それでも彼女の顔を見る事は止めなかった。

この長い人生でもう二度と会う事の叶わないだろう、ルネサンス時代の彫刻や或いは神話時代の美の女神アフロディーテを描いた絵画のように美しい少女を少しでも心に留めようという、純粹な思いからだつた。

それだけ一誠は彼女に対して本気で恋をしていた。普段はエロだ胸だと騒いでいるからこそ、燃え上がった。

そうして一人で固まっていると、倒れている少女の臉がピクリと揺れた。揺れが大きくなるに従って汗が流れる。この状態で意識が戻れば間違ひなく自分は不審者扱いされてしまうという恐怖だった。逮捕もそれに伴う停学も今となつては最早恐くも何ともないが、彼女に嫌われる事だけは避けたかった。

一步、二歩と後ろに下がり、それから改めて言葉を描けてみた。

「だ、大丈夫ですか………！」

急激に喉に力が込められた為に上ずつた変な声が出てしまう。駄目だ、これでは緊張している事がバレてしまう。思わず眼を覆いたくなつたが相手の少女は特に反応する事もなく、ゆつくりと瞳を開けた。

驚いた事に彼女の虹彩の色は透き通つた赤だった。パチパチと臉を上下させ、状況をある程度察したのか隣に座り込んでいる一誠を見た。

何処か落ち着きの無い、可愛らしい少年というのが第一印象だ。必死になつて此方を見ているその眼は好奇ではなく、心配に溢れているのが見てとれた。久しく忘れていた暖かみに触れた気がしたが少し首を振つて否定する。

そうして自分を懐抱してくれたであろう彼に薄い笑みを見せた。使い古した微笑だ。

「ああ、ありがとうございます……。助けてくれて……」

思つたより力が出なかつた。妙に掠れた声が頭に届く。自分らしくない弱々しい声

だった。

一誠はイメージしていた物と同じく、病的で儂げな声が聞けたと前にも増して高揚していた。自分が悪を打ち砕く騎士となって、このか弱い姫君を護りたい。そう考えると今の自分がとても勇ましい、まるで国を救った英雄の様に思えた。

俺はこんな美少女の微笑みを知っているんだぞ、と悪友二人に今すぐにも自慢をしなくなつた。それ程までに光榮に思えた。

少女の声に呼応して自分も言葉を返した。喉に力を込めて、なるべくクールに格好良く思われるような声を演じた。

「大丈夫なら良かったです。ええと、どうして倒れていたのでしょうか……？」

緊張はまだ解けていなかった。それで敬語になってしまったが、美しさにひれ伏せているという意味では正しかったので直ぐに違和感も消えた。次にこの少女はどんな姿を見せてくれるのだろうか。

淡い期待を抱きながら一挙手一投足に神経を集中させた。迪々しい仕草で手を顎に当てるその様も眼に焼き付けようと凝視していた。

一方で白髪の少女は刺さるような視線に少しの失望を覚えながらも、何とかそれらしい答えを考えていた。

全てを話すには全てが足りない彼が信じそうな嘘を、起きたばかりの脳を静かにフル



回転させていた。

「実は私は正教会からこの町に派遣されてきたシスターなのです。教会の位置が解らず、迷っている内に倒れてしまつて……」

吐いた嘘は丸つきり偽りでは無い。実際に自分は町の地図を把握していない。東の島国程度は地図を見なくても余裕だと高を括つていたツケが訪れたのだ。道を訊ねようにも今日は平日なので公園を通る者は誰も居ない。

そうしている内に路銀が尽きてしまい、空腹で倒れてしまったのだ。少なくともこの少年には絶対に知られたくない事だった。

しかし一誠には目の前の少女が、普段見る機会の少ないシスターだという事もあつて更に輝いて見えた。日本人は教徒でもない限り聖書の教えに余り詳しくない。知つているとすれば聖マザー・テレサのように様々な慈善活動を行つていふという事程度だろう。

その為、この少女は迷える人々に善と微笑みを与えて回つている心優しき救世主だと思つた。

ふと周囲が薄暗くなつてゐる事に気付いた。少女は公園内に設置されている大きな時計に視界を移した。二本の細い針は午後六時を指していた。このままだと夜になつてしまう。そうなれば教会探索が困難になる。

どうしようかと悩んでいると視界の端に少年が写り込んだ。彼はこの町の出身だと予測していた。でなければこんな時間帯にこの公園を通る筈が無い。となれば訊ねる事は決まった。引き続いて、細い声を出した。

しかしその前に一誠は頬を掻きながら告げた。今はとにかく好感度を上げる事が優先だった。ならば自分がやるべき事はただ一つ。

「あの、教会なら案内しますよ?」

「本当ですか……!?!」

なるべく嬉しそうな顔を心掛ける。予想外な風をアピールすべく敢えて過度に驚いた。不馴れな外国人だという点を考えての行動だ。

喜ぶ様子が嬉しくて、もつと笑顔が見たくて。彼は「行きましょう」と少女の手を取った。優しく立ち上がらせると噴水に背中を向ける。教会の方角は知っていた。

歩き出す前に聞き忘れていた事を一誠は思い出した。公園から噴水までの道のりは自転車では数分かからないが、徒歩となると案外遠い。その時間を談笑に花を咲かせたくて、まずは第一歩を踏み出した。

「あの、俺は兵藤一誠です。貴女の名前は……?」

自己紹介をすっかり忘れていた。気に食わないと言えど助けられた恩を忘れる事もしたくない。名前を教える程度はサービスしても良いだろう。立ち止まり一誠の顔を

見て、少女はそつと名を告げた。美しいピンクの唇が動いた。

「フリード・セルゼンです……。宜しくお願いします……」

夕日が眩しく光る。オレンジに染まった砂利道を二人は歩き出した。後ろに細長く延びた黒影が自分達のこれから続く時間を暗示しているように一誠は思えた。

## life. 2 無知

季節は春。近年開発されたこの駒王町は元々が自然豊かな地であつた為に緑が各所に残されていた。

町の中心に比較的規模の大きい公園を沿えて、そこから広がるように道路や各機関が設計されている。遊歩道に隣接して桜並木を設ける等、特に桜の木をイメージとして多用していた。

花が九分咲きとなり見頃となつたソメイヨシノを眺めながら、一誠とフリードは歩いてきた。本当は教会までもっと早く到着する道があるのだが彼は敢えて大通りを選択した。

理由は二つあり、一つは早く到着する道は、この時間帯は人気が少なく危ないからだ。フリードは自分の理想像だという事を差し引いても、とても美しい。ともすればその美しさ、日本に馴れていないという弱味に漬け込む輩が現れるかもしれない。これも年頃の男子。体力には自信があるが、数で攻められれば守りきれないだろう。そうなるよりは交通量の多い通りを歩く方が安全だった。

もう一つの理由は、こちらは単純に長い時間を過ごしたかつたからだ。この桜並木の

道は教会まで少々遠回りのルート。数十分は余分に稼げる計算だ。それに美しい桜を存分に楽しんで欲しかったという事もある。

そう思いながら、たまに自動車が通りすぎていく中を他愛ない日常会話で過ごしていた。

フリードは自分の手を握り締めながら歩いていく一誠を少し羨ましく思えた。見知らぬ自分を助けた優しさ、人を惹き付ける明るさ。どれも自分が知らない事ばかりだ。彼のドジなエピソードに適当に相槌を打ちつつ、桜に眼を向けた。鮮やかに咲き誇る白みがかかったピンク色は見る人に元気を与える。何本も過ぎ去っていく中で、ふと頭に何かが触れた。

手で抑えてみると花びらがくつついていた。ソメイヨシノ特有の甘い匂いが鼻をくすぐる。

「フリードさん、頭に花びらが——」

「え……」

身長は彼の方が少し高いので少し腕を上げるだけで頭を越えてしまった。そのまま彼女の頭に手を触れると、後ろ髪に引つ掛かっていたもう一枚の桜の花びらを指と指でつまみ上げた。そしてフリードの手に優しく乗せた。

彼が乗せた花びらは彼女の花びらよりも一回り大きく、隣り合った様子は丁度今の自

分達みたいだった。立ち止まってよく観察してみた。フリードのは薄く赤い線がスツと入れられており、一誠のは黒い線が入っている。二人をイメージする色彩だった。

線をなぞったり匂いを嗅いだりしていたが急に横から吹いてきた風に二枚とも飛ばされてしまった。

大きく浮かび上がった花びらは、次にはその姿形は無かった。何処かがっかりしながら隣を見た。車道側に立つ一誠は屈託のない笑顔で手を差し出した。再び互いの手を握り、歩き出す。

「この町は自然が綺麗なんですね」

「ええ。ここいら辺はビルが立ち並んでますけど、少し進んでみればまだまだ残されていますよ」

小学校の駅見学の時、記念に貰ったパンフレット。路線開通や車両紹介と共に町の歴史、広大な自然のイラストが掲載されていた。

当時は何故駅の事なのに町の歴史が載っているのかが理解出来ず、そのために紹介文が印象に残っていたが一誠はそれを深く感謝した。先程の言葉はそのパンフレットの受け売りだが彼女は満足そうな顔をしていた。

フリードは一誠がある程度知的な返答をした事に少しだけ驚きながら、その言葉を確認する為に遠くを眺めた。ビルに遮られる部分もあるがエメラルドとモスグリーンの

二色に染められた山々が確認出来た。成程、どうやら本当に急成長した町らしい。それなら彼女達が潜伏先を選んだ理由も解る気がした。

と、一誠は道を横に曲がった。一軒家が割り当てられたブロックに従って整理しているのが見えた。闇が一層濃くなり肌寒くなってきた。生憎とこの白い制服は完全な防寒対策をされておらず、僅かに空いた隙間から乾いた風が入り込んでくるのを感じた。吐息は色が付けられていた。

震えていると身体が重たくなるのを感じた。黒が視界の端に映る。よく見てみればそれはブレザーだった。彼が着ていた制服だった。何も言えなかったが、一誠は気にする素振りを見せなかった。

住宅街を越えて小高い丘に進むと背の高い清潔感ある建物が迫ってきた。漆塗りされ黒くなった瓦の上に木材で造られた質素な十字架が刺さっていた。探していた教会だった。程なくしてその教会に辿り着く。

石で造られた玄関の奥に一誠より更に大きな扉が二枚そびえていた。小さな旅は終点を迎えた。肩に然り気無く掛けられていたブレザーをそつと返却した。

ありがとう、と聞こえない事を祈って呟いた。一誠は聞こえない振りをしたまま笑いかけた。

「着きましたよ、教会」

「ありがとうございました。見ず知らずの私の為に……」

彼にとつては別に礼を言われる程の事をしたつもりは無い。寧ろ、此方が礼を言いたい気分だった。なので気にしないようにと言いながら一誠は自宅の方角に身体を向けた。すっかり遅くなってしまった。両親には上手く言い訳するつもりだった。フリードとのささやかな時間は言いたくなかった。

頭を下げながら彼女が教会の中に入っていったのを確認して、自らも歩き出した。今日は人生で一番幸せな日だと断言出来た。何処と無くリズムを取りながら彼は闇の中を進んでいった。

兵藤一誠は知らなかった。フリードの傷だらけの過去も、必死になって苦しみに耐えている事も。

そして今まさしく教会内で暴力を振るわれている事も、一誠は知らなかった。彼女を好きだと断言するには彼は余りにも知らなさすぎた。

無意識に求められていた救いを今はまだ与える事が出来なかった。



## l i f e . 3 変貌

一誠とフリードが出会った日の翌日。金曜日、午前八時。

学生達は二日間の休日をどう過ごすかを真剣に考えていた。駒王町の中心から少し西に位置する全国十指に入る私立高校、駒王学園もまた騒がしくなっていた。

私立としては珍しく土曜日授業が設けられていない為に生徒達はやけに浮わついていた。流行りのゲームやクラブ活動、県大会。様々な雑談が各教室で行われている。だがその日、二年Ａクラスだけは緊迫した空気に包まれていた。

登校してきた者は最初に驚き、次にあり得ないと確信したかった。今までなら例え世界が滅びようとそれだけは無いと胸を張って断言出来た筈のそれは脆くも崩れ去ってしまった。混乱は恐怖を招き、恐怖は加速度的に広まっていく。その場に力なく座り込む彼等の視線の先にある者。

真剣に考え込む兵藤一誠、その人だった。

彼が考え込む事は何も珍しい事では無く、何回も見てきた。しかしそれは教師陣も把握していない覗きポイントを新たに生み出したり、バレない覗きの方法を計画したりとエロ関連が殆どだった。

その度に隠しきれない欲望丸出しの卑猥な顔をしていたが今回は違う。机の上に座り脚を組み、普段の態度からは想像出来ない凛々しい表情ですつと何かを思考していた。

時折聞こえてくる呟きも、恋をした相手に振り向いてもらえる方法など、欲望を排除した純粋な恋愛事だ。

女子生徒は内容が内容の為に咎める事も出来ず、寧ろ顔を紅潮させていた。

一誠の余りの変貌ぶりには小学校時代からつるんできた悪友、松田と元浜も酷く狼狽した。

小学一年生の頃から共に悪さをしてきたからもう十年は一緒に過ごしてきた。相手の大概の事は知っていると豪語できる程の仲だが、その彼等でも今の一誠は見た事が無かった。おそるおそる彼に近寄ってみる。

「おーい、一誠。どうしたよ、そんな難しい顔してさ」

「ほら、新しいDVD手に入れたんだぜ！ 放課後俺の家に来いよ!!」

二人が掛けた言葉は何時も通りの観賞会のお誘いだ。このイベントも何百回と開いてきた、最早恒例行事である。自分が知っている兵藤一誠ならまず間違いない、顔色を変えて食い付いてきたし、以前のままの彼ならば眼の色を変えただろう。それは本人も認めざるをえない。

だが今の彼にはそれは余りに虚しく思えた。パツケージのタイトルにも女優にも沸き上がる物を全くもって感じる事は無かった。一誠にとつてDVD観賞はフリードへの裏切り行為に他ならない。そんな事になるなら今此処で飛び降りた方がはるかに良かった。裏切る事だけはしたくなかった。

一誠は直ぐに窓の外、今も成長を続ける町の風景に眼を移した。それから軽く首を横に振った。

「ごめんな。俺、好きな人居るんだ。そういう系統のDVDを見るのは彼女を傷付ける事だと俺は思ってる。だからすまないけど観賞会には行けない」

意外だった。まさか観賞会を断られる日が来るとは夢にも思わなかった。いや、それよりも彼の発言が気になった。

「好きな人が居る」

昨日までの彼は特段怪しい様子は無かった。嘘をつくのが下手な一誠の事だから何かあれば直ぐに言動に出ている筈だ。という事は昨日の放課後、もしくは下校中に出会いはあったという事になる。あの一誠が此処まで本気になる女性。クラスメイトは相手が誰なのか興味を持った。

こういう場合、女子達の行動は驚く程に早い。噂好きな性格の子が大多数を占める女子陣営は困惑する悪友二人をはね除けて早速質問攻めを浴びせる。左右に束ねたロン

グヘアの村山とカチューシャが特徴的な片瀬もその内の二人であり、彼女達はあつという間に一誠の隣のポジジョンを確保した。

「ねえ、一誠君！ そのお相手の女性は誰なの!?」

「この学園なの!? あ、まさか二大お姉様！」

二大お姉様とは美少女揃いのこの学園において特に美しいと評判の三年生の女子二人である。

紅の髪に浮世離れた抜群のプロポーションを誇るリアス・グレモリー。理事長の妹であり、中世ヨーロッパから続く名門貴族の跡取りだと噂されている。

もう一人は姫島朱乃。黒髪をポニーテールにした和風な佇まいの美少女。温厚でしつかり者な大和撫子だ。二人とも入学当初からアイドルにも劣らない美貌と飾らない性格で学園中の人気を集め、何時しか尊敬の念を込めて二大お姉様と呼ばれるようになった。

彼女達の美しさは一誠も認めるところだ。実際に何度か遠目に見かけた事がある。その時は二人が大勢のファンクラブに囲まれていたのであまり良く見えなかったものの、確かに騒がれても充分可笑しくないレベルだった。ただ、二人の顔を思い出しても尚フリードの方が美しいと言えた。比べる事すら愚かしい。

「ああ、違うよ。確かに可愛いとは思うけど、俺が惚れた女性はその二人じゃない」

「そうなの？　じゃあ誰なのか教えて！」

然り気無く全員の代表的な役目に就いている村山と片瀬。眼を爛々と輝かせるクラスメイト達にそろそろうんざりとしていた時、ホームルーム開始のチャイムが学園に鳴り響き同時に担任の教師が入ってくる。一誠の元にクラスメイトが集まっている光景に驚きながらも手を叩き、席に戻るように指示をした。

女子達はまた後でね、と微笑みながらその場から捌けていった。教師が最近多発している殺人事件について注意を呼び掛けているがフリードの事を考え込む彼の耳には届かなかった。

どうしたらもう一度会えるのだろうか。また教会を訪ねれば顔を見せてくれるのだろうか。あの彫刻のような慈愛に溢れた笑顔を自分に与えてくれるのか。だが昨日の今日に会いに行つたのでは露骨過ぎる。

もつと慎重に行動すべきだ、と担任が教室を出ていく様を見ながら今後の動きを練つていた。



結局学園では殆ど考える事は出来なかつた。担任が教室を出ると同時にまたも繰り広げられる問答。休み時間は勿論、授業中も視線を感じた。これでは落ち着いて考える事など出来よう筈も無かつた。昨日のように公園に足を進めた。もしかしたらまた噴

水の前で倒れているかもしれない。

そんな願いを抱きながらあの白い噴水の前を通り掛かった。円形に並べられたタイルの上にはやはり彼女は居なかった。その代わりに黒い髪を腰まで延ばした美少女が一人、立っていた。見知らぬ制服を着ている少女は何処か優雅さを感じさせた。

誰かを待つているのかとそのまま歩き出すと、澄んだ声が聞こえた。辺りを見回すと後ろにあの少女が立っていた。心なしか震えているように見えた。

無視する事も出来たが敢えてそれをせずに自分から口を開いた。

「あの……俺に何か用ですか？」

「よ、用と言うより……!!」

一誠は少女と面識は無かった。初めて会う少女だった。黒い髪を揺らしながら相手はゆつくりと話を始めた。その内容は彼にとつては衝撃的な物だった。何故自分なのか。何故このタイミングなのか。解らない事が多すぎた。

「——私と付き合って下さい!!」

たった一つの告白。それが今、二人の未来を大きく変える事になるとは一誠もフリードも。そして少女自身もまだ知る由も無かった。狂った運命の歯車は既に廻り始めていた。

## l i f e . 4 処刑

黄昏が金色の光を溢れさせる。暖かな、それでいて刺さるような日差しを浴びている噴水は白い身体をオレンジに染めていた。外国の市場に並んでいるように鮮やかだった。

その前で一誠と少女は互いに立ち尽くしていた。少女は天野夕麻と名乗った。本人曰く駒王町に引越してきたばかりで明後日から近辺の公立高校に通う予定らしい。

転入の為に高校を見学し、その帰りに一誠に一目惚れしたと彼女は顔を赤くしながら語り始めた。一誠は夕麻に背を向け焼けた空を見ながらどう断るかを考えていた。

少女は充分美少女でスタイルも良い。以前なら鼻の下を伸ばしながら二つ返事です承しただろう。

だが、もう彼の心の中にはフリードが立っている。それを考えればやはり付き合う選択肢はあり得なかった。

それに何処か彼女は胡散臭い雰囲気醸し出していた。神経を集中させなければ解らないが、時折感じる寒気と黒いオーラは間違いなく人間が出せる類の物じゃ無い。もっと別の、自分が知らない別のナニカ。

一刻も早くこの場から立ち去りたかった。自室の机の引き出しに保管されているスケッチを完成させたいし、どうフリードと再会するかもまだ全然練れていない。一誠にとってその二つの項目は何がなんでもやり遂げたかった。だから断りの言葉を頭の中に幾つも並べていた。

幾ら得体の知れないとは言え一応は女性だ。自分が感じたのだったって単に風邪気味なだけ。そう無理矢理に納得させ、心を落ち着けてから単語選びを再会させた。

余り遠回りに伝えるという選択はしたくない。何故ならそれで誤解が生まれやすいからだ。伝えたい事はハッキリ伝えないと新たな揉め事の火種になりかねない、と一誠は慎重に案を絞っていく。

やはり朝、松田と元浜に言ったように好きな人が居るからと伝えた方が良いだろう。これだ、と告白の断りを決めいざ伝えんと身体を夕麻の方向に向き直した。そして眼を見開いた。

「答えるのが遅い!! このレイナーレ様が付き合つてやると言ってるんだから素直にイエスと答えれば良いのよ!!」

夕麻の服装は清楚なワンピースから露出度の高いボンテージに艶かしく変化していた。否、それだけにあらず。八重歯は獣のように鋭く尖り、どす黒い翼をはためかせ右手には光の集まった槍らしき物体を握り締めている。とても数瞬前の彼女とは思えな



い。それだけあの少女は変わり果てていた。

そして夕麻は自分をレイナーレだと叫んだ。少なくとも日本でそんな名前は、例えこの時世キラキラネームが流行っているとは言えど、流石に存在しないだろう。ならその名前は何だ。天野夕麻は偽りで、レイナーレが本当の名前なのか。

ならば何故レイナーレは一誠に接触した。此処まで変異して一途に思ってくれているとは、とても思えない。なら、他にどのような――。

そこまで思考する事、零コンマ一秒。脚が勝手に左に駆け出した。脳がついていけずバランスが崩れ地面に倒れ伏す、その瞬間に一誠はあの光の槍が今まで自分が立っていた場所を貫いている光景を見た。

反射神経だった。特定の刺激に対する、無意識下に起こる超スピードの反応。急激な運動に肺が息を荒げる中でレイナーレは意外そうな表情で拍手喝采を贈る。

そしてもう一本、周囲から光を集め槍を生み出した。もしもう一度投げられれば今度は助かるか解らない。異様に時間が長く感じられた。眼を離せばそれは即死亡に繋がる。究極かつ理不尽なデスゲームが彼を捉えて放さなかった。

強烈な光が彼女の左手に起こった。

「……………ッ!!」

避けていた。輝きを視認した直ぐ後に身体は横に加速していた。覗きをしていた頃

に鍛えられたか、と一誠は自分の愚かさに若干感謝しつつも素早く起き上がろうとした。不意に視界が黒くなる。

形から推測するに彼女の影、つまり今自分の前にレイナーレは居る。避ける事は完全に来ない。この距離だ。彼女が特別に投擲が下手だとしてもこの巨大なものを、しかも至近距離で外すという希望は最早無いに等しい。

そして背中に光が突き付けられたのが影で解った。触れるか触れないかの僅かな距離で妙な冷気が無防備な身体を蝕んだ。

感嘆の声をレイナーレはあげた。

「二回も私の槍を避けた人間は貴方が初めてよ、一誠君。でも所詮は人間！ 至高の墮天使たる私には勝てない!!」

シルエツトだけで解る、狂気。高笑いを一頻り続けた後に改めて槍を構え直した。形がグネグネと歪んでいき先端が細長い三叉槍へとより凶悪に進化を遂げた。

ギリシヤ神話に登場する大海原を統べる神、ポセイドンが手にしている槍と同じだった。鋭い返しがついたそれは一度でも刺さればもう逃げられない。血と怨念を流しながら苦しみに溺れるだろう。彼女の瞳が赤く光った。人外という動かぬ証拠だ。普通人間は光らない。

「ゴメンね。貴方が危険因子だったから早めに始末させて貰うわ。恨むなら聖書の神に

して頂戴ね」

同時に三つの穂が背中に食い込み始めた。先端が刺さりそのまま豆腐のように深く深く沈んでいく。骨、肉、神経。肉体を構成しているあらゆる物質を巻き込み粉碎し、喰らっていく。スローモーションのように敢えてゆっくりと胴体に大穴が開けられた。

声にならない悲鳴。血涙を流し、獣のような叫びをあげ一誠はもがいた。しかし瞬時に両手両足に光の楔が打ち込まれる。碎かれ逃げる事すら出来なくなった彼はフリードの事を思いながらミキサーに吞まれていった。

やがて一誠は芋虫のように蠢く事しか出来なくなつた。その眼は虚空を見ていた。

「……じゃあね、兵藤一誠」

レイナーレは邪悪な笑みを浮かべながら飛び去つて行つた。彼は呼吸も絶え絶えに骨が砕かれた手を伸ばす。

その手は彼女に向けてでは無く、大空を飛ぶ鳩に延びていた。白い身体を誇る美しい鳩に想い人を重ねて、力尽きる間際彼女の笑顔を思い浮かべていた。

一枚の白い羽根がゆらりと墮ち、手に触れた。白と血が混じりあつたコントラストはあの桜の花びらを思い出させる。

皮肉げな笑みを浮かべ、そして一度頭を揺らした。瞑られた瞼はもう動く気配を見せなかつた。

一羽、二羽。空に集まっていた鳩達が次々と一誠の身体に集まり体温を取り戻そうと  
していた。仲間を助けんとする本能のように赤い鳩はただはためいて、そして一迅の涙  
を流していた。



黒は白を呼び、白は紅を呼ぶ。静かに魔法陣が出現し、一人の少女が降り立った。無  
数の鳩に囲まれた一誠を見ながら彼女は駒を取り出した。

「……良いわ。私の為に生きなさい」

鳩達が絶望の声をあげながら飛び交う中で現れた少女はその駒を一誠の胸に押し込  
んだ。彼が眼を冷まさぬ内にその紅髪影は一誠と共に、闇に溶け込んで消えていっ  
た。

## l i f e . 5 再現

勉強机の上に置かれている目覚まし時計に包丁を手にした黒髪のキャラクターが映し出され、「オキナイトコロシマス」と連続的に告げ始めた。

ずっと昔に雑誌の懸賞で当選したオリジナル目覚まし時計は朝の六時半を示している。

泥のように眠り込んでいた一誠は重たい瞼を擦りながら上体を起こした。月曜日の時間割に合わせて教科書を鞆に詰めていき、それから朝食を取るべく階下のリビングに歩いていった。

食卓の席には既に父親が座っていた。新聞を読む彼の隣には母親が卵焼きを更に加えていた。何時もと変わらない日常の始まりだった。三十分程で朝食を食べ終わり、「ご馳走さま」と告げてから自室に戻った。

制服に着替えながら一誠は自分の身体の変化を改めて感じていた。金曜日、気付けば自室のベットに身体を預けていた。下校していた筈が空間を飛び越えて知らぬ間に帰宅していたという怪奇現象に困惑していると、幾つかの記憶がフラッシュバックする。

あの公園で夕麻という美少女に告白され、そして彼女は墮天使となり、自分は無惨に

殺されてしまう。どうしてもそこから先が解らない。思い出そうとすればノイズが入るからだ。

まるで誰かが意図的に記憶を封印した、そんな感覚だった。そしてその恐ろしい悪夢を見てから一誠は夜型の体質に変化していた。異変は金曜日の夜に初めて現れた。自室には明かり取りの窓が一つ設けられている。窓からは近所一帯が良く見えるが何となく夜に眺めている方が気分が高揚する気がしていた。

烏の低い鳴き声が異形への扉を踏み込んだ祝福に聴こえる。黒くなればなる程に身体の底から力が沸き上がった。実際に確かめてみるべく、こっそりと家を抜け出してみた。家の鍵を持って、窓から飛び降りたのだ。

かなり高い地点から落ちたにも関わらず傷一負わなかった。無償に走り出したくなり駆け出した。直後、凄まじい風が空気抵抗の塊となって顔を直撃した。

自転車よりも速く公園まで辿り着いていた。歩けば数十分は必要とする距離を僅か数分にまで縮めていた。体力は充分に残されている。だがこれ以上は騒ぎになるかもしれない為に踵を返し家に駆けていった。陸上部よりも明らかに速い、異常なスピードだった。

真夜中での素晴らしい運動神経とは打って変わり日中での活動は苦手になった。太陽の光が服を通り越し肌に刺さるようになった。馴れれば痛みは引いていったが尚も

チクチクと違和感を感じる。

外に出るのも億劫だがこのまま引きこもる訳にはいかない。朝と夜のギャップに振り回されながら一誠は休日過ごし、月曜日を迎えた。

行つてきます、と気だるげに言葉を投げながら扉を開けると全身が嫌悪感に襲われた。何かが狂っているように感じられたが彼は引き続き歩き始めた。

「あ、一誠君！ おはよう!!」

「今日も凜々しいね!!」

鬱陶しい痛みには耐えながら教室に入ると既に登校していた女子達が駆け寄ってきた。黄色い歓声を浴び、困惑しているとその群衆を押し退けて悪友二人が迫ってきた。彼等もこの状況が理解出来ない様子だった。

一先ず荷物だけを机に投げ捨て、松田と元浜の手を引っ張り走り出す。速度を調節していたがそれでも充分に速く瞬き一つする間に女子達は見えなくなつた。屋上へ続く階段に倒れ込むと早速松田が捲し立ててくる。

何故急にモテるようになったのか、という怒気の混じつた質問だが残念ながら彼にも理由は解っていない。もし解つていればとうに説明している。自分もまた首を横に振ると二人は残念そうに座り込んだ。

「俺はてつきり、女子達にモテる方法を編み出したと思つたんだ……」

「悪魔に魂を売り渡したとばかり……」

この世のありとあらゆる絶望を味わったかのような声を出しながら元浜は窓際に歩み寄った。そして空かさず一眼レフカメラをポケットから取り出し連写し始めた。

彼の職人振りに松田と一誠も何事かと窓から下を見下ろした。あそこだ、と元浜は指を指す。

その先に、彼女達は居た。

ファンクラブに手を振りながら本校舎に歩いてくる二大お姉様。リアス・グレモリーと姫島朱乃だった。花のような笑顔を振り撒きながら歩く二人は様になっておりトップロモデルのような、一種の優雅さがあつた。その人間離れした美しさに魅了され松田が涎を垂らしているが一誠は何故か身体が小刻みに震えだした。

蛇に睨まれた蛙という諺があるが、まさにその状態だ。リアスの紅玉の瞳が自分を真つ直ぐに捉えていた。

ドクン、と右手が一段と深く鼓動を刻み始めた。彼女は一瞥するだけでそのまま校舎に入ってしまったがそれでも鼓動が収まる様子は無い。可笑しい。自分の周囲で一体何が起きているのか。尻尾すら掴めないが兵藤一誠という人間が巻き込まれた事は確かだ。その事件は身体能力の大幅な上昇にも繋がっているだろう。

元の平穏を取り戻す為にも一誠は先ず何らかの事情を知っていると思われる、リアス



との接触を目論んだ。

始業の鐘が鳴り響き、慌てて走っていく三人。その様子を一匹の蝙蝠が視ている事に、一誠は気付いていなかった。



午後六時。一誠は放課後になってから、ずっと彼女の情報を集めていた。リアスが好きだと周囲に誤解されたくは無いのでファンクラブが運営している裏サイトにこっそりと潜り込んでの情報収集だった。

その結果リアス・グレモリーの情報は異常な程に少ないという事が解った。常連達の書き込みをチェックすると彼女についての情報は、理事長の妹である事と実家が大金持ちである事の二つしか存在しなかったのである。

普通ならもう少し知られていても良い筈なのだ。それがファンクラブを持つてもこの程度。やはり理事長の妹という事で情報規制されているのだろうか。彼の中でリアスという人間への違和感が増した。

今日もまた薄暗い公園を歩いての下校だ。もしかすれば会えるかもしれない。藁にすがつての行動だった。

「明日、直接会ってみるか……」

彼女のような有名人が一生徒に過ぎない自分に時間を割いてくれるだろうか。考え

込む一誠の足下に黒い羽根が舞った。瞬間、あの悪夢が脳裏になだれ込む。目の前に男は立っていた。紺色のコートを着用した紳士的な男。その背中には二対の黒い翼が広げられていた。

一誠は咄嗟に走り出した。レイナーレの再現と言えるあの男から絶対に逃げ切らなければならぬ。噴水を飛び越え植木に逃げ込み、入口まで一直線に駆けた。だが羽根は舞う事を止めない。背後からは異質な空気が流れていた。

「——ふむ、はぐれ悪魔ならば殺しても問題は無かろう」

光の粒子が集まり、槍が男の手元に完成した。そこまでレイナーレと同じだった事に一誠は恐怖を覚えた。あの夢は現実に起きた事だったのだ。逃げようとするがその直前に胴体に衝撃が走る。それもあの時の比では無い。

内臓が焼かれ、喰われていく。必死に抜こうとするが触れた両手をも光は慈悲無く焦がしていった。肉の焼ける匂いが血と混ざった。一誠は男を睨む事しか出来ずにいた。

その時、紅が視界を覆った。文字が細かく書き込まれた円形の術式が地面に浮上し一人の少女の姿を描いていった。魔法陣と同じ色の髪をはためかせて少女は男と対峙した。

「私はグレモリー家の次期当主、リアス・グレモリー。そして、この子は私の眷属。——手を出すなら容赦しないわよ？」

「その台詞をそっくり返そう。グレモリー家の娘よ。我が名はドーナシック。再びまみえない事を願う……………」

黒い翼を豪快に羽ばたかせ、ドーナシックと名乗った男は何処へと飛び去った。リアスは途端に一誠へと向き直る。

だが緊張が解れたのか、彼の意識は既に闇の中だった。彼女は優しく抱えあげるとまた魔法陣を展開した。光が収まるとそこには喧騒の後も黒い羽根も、残されてはいなかった。

## l i f e . 6 歓声

「ロクジハンダヨ!! サア、キョウモイチニチバリバリハゲモウ!!」

雑誌オリジナル目覚まし時計の特徴の一つとしてバリエーション豊富なボイスアラームがある。病弱な妹キャラから始まり幼馴染みや人妻、果ては宇宙人。コアなファンの要望にも答えるべく実に三十余の限定ボイスが設定されていた。どうやら今日は元気なブルマ娘らしかった。アラームを止めるべく手をもぞもぞと無造作に動かし、そこで柔らかい物に触れた。

マシユマロのような高い弾力性がある。部屋には抱き枕カバーこそ何枚も保管されているが本体は置いていない筈だ。では、このクッションは一体何なのだろうか。カーテンを閉めきつてもまだ馴れる事の無い日光に痛みを覚えつつ、その問題のクッションがある左方向に視界を寄せた。

まず真つ先に入っただのは紅だった。透き通る作ったような紅が上半分の殆どを占めており後は白色に塗られている。訳が解らずポカンとしていたが頭が冴えてくると徐々に滝汗が流れてくる。ベットに寝ていた物体はお化けマシユマロでも抱き枕でも無く、間違いなく人だった。一誠に背中を向けているが体格からして女性だ。それも

裸の。

そして同時に自分も服を全く着ていない、全裸である事に気が付いた。これはつまり、目の前の女性と一線を越えてしまったのか。慌てて昨日の記憶を探りだす。確か放課後は公園を通り、そこで――。

今度はハッキリと記憶があつた。一誠は戦慄し、貫かれたであろう腹の辺りを探る。光の粒子に触まれた痕は残されていない。だがあの喰われるような痛みは今も覚えていた。

と、隣に寝ている女性が目を覚ましたのか起き上がった。思考対象を彼女に変更した一誠は取り敢えず朝の挨拶を延べ、それからこの状況に陥つた理由を訊ねようと考えた。墮天使も気になるが一先ず後回しにし女性への対応を練るべき。そう判断し女性に声を掛けようとするが露になつた顔を見た途端に表情が固まる。

そうだ、何故思い出せなかつた。

紅髪で尚且つ自分の近くに居る女性は一人しか存在しない。警戒を強める彼とは対照的にその女性、二大お姉様の一角たるリアス・グレモリーは能天気な欠伸を浮かべた。「おはよう。眼が覚めたのね」

「リアス・グレモリー。何が目的だ？」

「あら、致命傷を負つた貴方を救つたのにその言い方は心外だわ。しかも、二度もね」

レイナーレ、そしてもう一人の墮天使。一連の襲撃にリアスが関係しているという彼の予測は正しかった。関係者か、少なくとも目撃者でも無ければ二度等という具体的な数字を示す事は出来ないからだ。しかし致命傷を救ったと言うのが気にかかる。彼女は敵では無いのだろうか。命を狙う輩が致命傷を治療する訳が無いと一誠は踏んだ。上手く行けばレイナーレ達についての情報を仕入れる事も不可能とは思えない。

それにはある程度のコミュニケーションが必要不可欠と言えた。取り敢えず互いに服を着る所から始まる。まさか全裸で話し合うという事もあるまい。

「取り敢えず服を着ないか。親が来るかもしれない」

「そうね、続きは今日の放課後にしましょうか。でも自己紹介だけはしておくわ」

気が付くと何の変化も感じさせない間に彼女は駒王学園の女子制服を着用していた。一誠は視線を外しておらず、瞬きすらしていない。物事には必ず『起こり』という物があるが彼にはそれが見えなかった。何も無い空間から突如として制服が出現したようにしか映らなかつた。

目の前の美少女が人間だとはとても思えなかつた。同様に胸の内部が騒ぎだす自分も、もう人間だと断言は出来ない。リアスも外見は人間だが種族的に言うとな彼女は人間にあらず。

人間より遙かに強い力を持ち、永遠に近い時間を生き、そして古の時代から恐れられ

ていた伝説の種族。神話上の存在だと思っていたその名前を一誠は知った。

「私はリアス・グレモリー。悪魔よ。そして貴方のご主人様でもある」

「——宜しくね、イツセー」始まった非日常をどう過ごすか。そして階段をドタドタと駆け上がってくる怒り心頭の母親にどう言い訳をするか。

二つの現実に関を痛めながら一誠は机の引き出しを眺めた。シスターと名乗った彼女とは果たして再会出来るのだろうか。

彼は不安に胸を詰まらせたが、まずは着替えるべく制服をハンガーから外した。プラスチックの安物のハンガーはそんな一誠の心情を代弁するかのように寂しい音を奏でた。



昨日は何処をほつつき歩いていたらと激怒していた両親だったが、リアスが手を翳すと不自然に静かになった。口振りからしてそもそも遅くに帰宅する事が当然だと認識しているようだった。

制服の件といい、両親といい、やはり彼女が悪魔である事は殆ど確定だ。続きは放課後と本人は言っていたがこの分だと良い事では無いだろう。一誠は嘆息し、今の自身の状況を垣間見て更に深く息を吐いた。

リアスは当然の如く朝御飯を頂戴し、そのまま彼と一緒に登校しているのだがこれが

不味かった。

一誠も本人もあまり気にしていなかったのだが、リアスは二大お姉様と称されるレベルの有名人でありその名前は校外にも広まっている。一誠もまた女子からの評価が急上昇しており今ではイケメンランキングの上位にも食い込んでいる程だ。

そんな二人が並んで歩けばどうなるか。答えは一般生徒が誤解しまくる、という事だ。しかも最悪な事に一誠の家から二人が出てきた場面をファンクラブの一人が目撃しており、通学路は駒王学園の生徒で埋め尽くされていた。まるで歓迎パレードのようだった。

鞆を片手に持つて呑気に歩いている彼女の隣で、一誠はまたも溜め息を吐き出した。失った平穩を惜しんだからであり、群衆に混じって中指を立ててくる悪友二人を見つけたからでもあった。

リアスと別れても質問攻めをされるだろう未来が容易に想像がついた。女子達の歓声にどう対応するのか。学園に辿り着くまでの数十分間、彼はひたすらに頭を抱えた。



## l i f e . 7 背 中

騒がしい時間は過ぎ去り、瞬く間に昼休みが訪れた。喧騒の原因である一誠は購買で購入したカレーパンを口に放り込みながら、周囲の視線に耐えていた。女子生徒達は勿論だがリアスのファンクラブの連中も相当数が紛れ込んでいる。どうやら彼等も敵に回してしまつたらしい。

憧れの二大お姉様の片割れと登校したのだから当然と言われればそれまでだが、どうにもやりきれない怒りが込み上げてくるのを彼は我慢するしか無かつた。

隣の机には松田と元浜が同じくカレーパンを頬張りながら周囲に気を配っていた。ファンクラブの暴走を危惧しての事だ。今や一誠は学園中の男子と敵対したと言つても過言では無く、何時その命を狙われるか解らない。

口では呪詛を吐いていても親友として動いてくれる彼等にただ感謝する事しか出来なかつた。

その時、廊下にまで溢れていた集団が騒がしくなつた。女子達の甲高い声と男子の舌

打ちが同時に聞こえる。

まさかリアス・グレモリーかと一誠は身構えたが、彼女は放課後にと言っていたし、仮にリアスが来訪したのなら男子は絶対に舌打ち等しない筈だ。リアスは学園のアイドルなのだから。では他に誰が居るだろうか。そこまで考え、教室の入口に鮮やかな金髪が見えた時点で来訪者の正体を察した。

映えるような眩しい金髪をしていて尚且つ女性陣に騒がれる人物は一人しか居ない。イケメンランキング一位に君臨し、プリンスの異名を持つ青年。

木場祐斗だ。群衆を暫く掻き分けていた木場だが目敏く一誠を見つけ手を振りながら近付く。

「初めて会うね、一誠君。僕は木場祐斗。リアス部長の命令で会いに来たんだよ」

「つまりお前もそちら側なのか。——で、用件は？」

彼は思わず、今頃は優雅に弁当を食べているだろう命の恩人に罵詈雑言を吐きそうになった。あの女は何処まで事態をややくしくすれば気が済むのだろう。或いは何も考

えていないのでは無いか。

只でさえ普段の五割増しで賑やかなこのクラスに何故プリンスと噂されている木場を向かわせたのだ。これでは周囲が興奮に包まれてしまう事は想像に難しく無い。折角朝の質問攻めを鎮圧したというのに、とわざとらしく頭に手を当てながら一誠は改めて用件を訊ねた。

リアスが一体何を言ってくるのか気になるからであつた。訊ねられた彼は渴いた笑いを発して答えた。

「えーと、放課後に迎えを寄越すから教室で待機していろと伝えるように言われたんだけど……………」

どうせ意味の無い事だろうと予想していたが案の定ろくでもない言伝だつた。そんな事の為に使いを出したのか。怒りを通り越して最早笑いが出てきた。急速にクールダウンしていく自身を感じて、気分転換に外の景色に眼を移した。二年Aクラスの窓は方角的に丁度あの教会に面している。

十字架を取つ掛かりに目的の建築物は直ぐに見つかった。落ち着いたら一度会いに行こうと決意しながら一誠は食べ終わったカレーパンの袋を握り潰した。原型を留め

ていないビニール袋は無惨な姿になって、ゴミ箱へと投げ捨てられた。



「じゃあ僕が先導するから、ついてきて欲しいな」

五、六時限目の授業が終わり、ある程度人がまばらになった頃に木場は入ってきた。どうやらタイミングを凶っていたらしい。一誠としても下手に騒がれるよりかはまだマシだったので彼の気遣いに感謝の意を示しつつ特に抵抗をせずについていった。だがやはり何人かの女子達は残っていたようで、道中で何度かすれ違った。

その度に向けられる好奇の視線を掻い潜りながら歩いていくとやがて一つの建物の前で木場は立ち止まった。目の前にそびえているのは生徒会から立ち入り禁止を命じられている旧校舎だった。異様な外観に戸惑っていると彼は馴れた様子で扉を開け、暗闇を進んでいく。

階段を三回程上がり一番奥の教室。オカルト研究部と描かれた札が貼られている扉をノックした。

「部長、彼を連れてきました」

「入って頂戴」

ガラガラと古い建物に付き物の音が廊下に響き二人は部屋にと足を進めた。入って直ぐに記された巨大な魔法陣に眼がいった。黒板には魔法陣と同じ訳の解らない文字が並べられている。成程、オカルト研究部と名乗るだけの事はあった。そして部屋を見渡しているとソファに人が座っている事に気付いた。

白い髪に淡い期待を乗せたが身長が低い。まるで子供だ。小さくて可愛いと評判の一年生、塔城小猫だった。普段は全く接点が無いから知らなかったが彼女もオカルト研究部に所属していたのか、と一誠は人は見かけによらないという慣用句を改めて思い出ししていた。

その時、奥の部屋で紅が揺れた。現れた影は二人。リアス、そして彼女と同じく二大お姉様と謳われる美少女。姫島朱乃だ。

イケメンプリンスの木場。マスコットの小猫。二大お姉様のリアスと朱乃。学園の

有名人が揃い踏みしていた。体育祭や文化祭でも先ずお目にかかれない。一誠は呑ま  
れかけたものの慌てて落ち着きを取り戻す。この程度で圧されてはこれから先ど  
うなるか解つたものじゃない。木場に促されソファに座る間も視線は外さずに居た。

一誠が腰を落ち着けた事を確認し、リアスもまたソファに座つた。場が静まり、事情  
を語るべく彼女は一枚の写真をテーブルにそつと置いた。写つていた人物は紛れもな  
く自分を刺したあの女、墮天使レイナーレで一誠も流石に動揺し引つたくるように写真  
を手にする。

寸分違わず記憶の中にあるレイナーレと同じだった。一誠はあの日の事を悪夢だと  
思い納得していた。公園を通り下校していたら何時の間にか自室で寝ていた。両親に  
訊ねても昨日と同じくらいに帰つてきたと言われれば悪い幻だったと処理せざるをえ  
ない。

しかし今こうして物的証拠を見せられれば、レイナーレは悪夢の存在では無かつたと  
断言出来る。そして彼女の写真で、リアスがこれから語る事は全て真実だと悟つた。朱  
乃が横から差し出した粗茶に口を着けながら彼はリアスの説明に耳を傾けた。

「さて、イツセー。単刀直入に言うると私達は全員が悪魔よ。レイナーレと昨夜の男は墮天使」

「——墮天使は元々聖書の神に仕えていた天使が邪な感情を持った為に地獄に墮ちた者。悪魔と墮天使、そこに神の命令を受けた天使勢力が加わって三すくみの状態を形成したの。基本知識として覚えて頂戴」

なら、何故自分は殺されたのか。レイナーレは危険因子だと言っていたがそれだけでは理解しようもない。表情から疑惑を読み取ったのかりアスは木場に目配せした。彼は一度頷くと手元に一振りの剣を造り出した。以前に見た着替えと同じく何の変化も感じさせ無いままに剣は生み出されていた。

赤い紋章が刻まれたロングソードを消し去りながら木場は深々とお辞儀をした。満足そうに彼女は一誠に向き直った。今見せてもらった説明出来ない現象が理由だと彼は悟り、頭を冷やそうと粗茶が注がれているコップを口元で回転させる。

水分が染み渡っていく感覚のままに一誠はリアスを見た。

「今祐斗が造り出した剣は神セイクリッド・ギアの能力。神器は人間の身に宿る規格外の力。私達悪魔や墮天使にとつて驚異となり得る代物もあるわ。——イツセー。貴方の身体にそれがあるのよ」

だから兵藤一誠は殺された。解つてみれば簡単な話だ。恐ろしいから消す。極めて単純かつ合理的で何よりも理不尽だった。思わず奥歯を軋らせた。如何に合理的とは言えどそれで自分の命を差し出せない。何時だつて弱い者は強い者に好き勝手にされる。世の中の摂理だと知つていても歯痒い、行き場の無い想いが一誠には確かに芽生えた。

知らぬ間に注がれていた粗茶をまた飲み干し、リアスをしっかりと見据えた。例え能天気でも、もうこれから無関係では無いのだろう。命の恩人に無礼な事はしたくなかつた。やや低い口調で彼は疑問を口にした。

「どうすれば神器は使えるんだ？」

「そうね……。眼を閉じて一番強いと思う者をイメージして。なりたいたい、と憧れる存在に自分を重ね合わせるのよ。そうすれば発現するわ」



「なりたい自分、か」

決まっている。彼女を迎えに行ける自分。彼女を護りきれぬ自分。またあの笑顔を見たい。一緒に桜並木を散歩したい。フリードの笑顔を守る騎士になりたい。

それだけが一誠の望みだ。自分は悪魔になってしまったがそれでも隣に居たいと強く思えた。

胸の鼓動、左手が熱くなっていく。赤い鱗が腕を喰らい成り変わった。鋭く光る爪、腕の二ヶ所に生える牙のような棘。そして甲に埋め込まれた翠の宝玉。人間では無くなっていた。これでは龍の腕だ。一部始終を見ていたリアスが拍手をしながら鱗に触れた。血は通っているらしく温かさが伝わってくる。

「それが貴方の神器。レイナーレはその神器を危険視して貴方を殺したのよ」

「あの時、使い魔からの連絡を受けた私は公園に急行したわ。墮天使は既に逃亡してい

てイツセーだけが倒れていた。私は貴方を一目見て神器所有者だと気付いた。だから命を救ったの」

「——悪魔としてね」

その言葉に呼応するかのように一誠を除く全員が瞑目し、次には背から翼を生やしていた。レイナーレの鳥のような翼とは違う、蝙蝠に似たそれはイメージ通りの悪魔の翼だった。

龍にも似た特徴は不思議な縁を感じさせた。驚くべき事に蝙蝠の翼は一誠にも生えていた。リアス達四人のと比べると少々赤みがかっている。フリードの瞳の色に良く似ていた。

「二年の木場祐斗です。宜しく」

「二年、塔城小猫。宜しくお願います……………」

「三年の姫島朱乃ですわ。一応、オカルト研究部の副部長です。以後、お見知り置きを」

そして最後に我らが主君の挨拶によつて兵藤一誠の悪魔ライフは始動した。果たして上手くやつていけるのだろうか、と不安を感じながらも一誠はこれから上司となる少女を冷めた目で見ていた。

この調子ではフリードとの再会はまだまだ遠回りになってしまふなど彼はまた粗茶を啜った。

「そして私が彼等の主。リアス・グレモリー。これから宜しくね、イツセー」

## l i f e . 8 成立

人間と契約を交わし望みを叶える見返りとして代価を得る。古から続いた悪魔のルールであるが、科学技術が発達したこの時代。悪魔や堕天使の類が全て空想上の存在だと思われている現代では魔法陣を描き彼等呼び出す人間が激減していた。

そこで悪魔は予め術式を印刷してある簡易版魔法陣を開発し、人間界にて欲深そうな人間に配布する方法を編み出した。結果として召喚する人間が増加し、悪魔の勢力が持ち直した事で以降も継続して行われている。

悪魔に転生した一誠が最初に命じられた任務はこのチラシ配りであり段ボール五箱に詰められた魔法陣を消化させるべく、彼はこの数日間を繁華街で過ごした。そして数日後にはチラシも配り終わり、いよいよ本格的に悪魔稼業をこなしていく事となった。

空となった段ボールを折り畳んでいく一誠の隣で、リアスに命じられた朱乃が空中に魔法陣を描いていた。

姫島朱乃。何時も笑みを絶やさず新入りの彼にも自らお茶を入れ、疲れを労ってくれ

る。気配り上手な性格である事を彼は知った。そんな彼女は部室の真ん中で何時になく真剣な表情をしながら文字を操作している。リアスの説明によると一誠に割り当てられた刻印を魔法陣に読み込ませているらしい。彼女の眷属である事を証明すると同時に、魔力を使う為にも必要な過程との事だ。

自分の左手を見ると家紋のようなマークがはつきりと浮き出ていた。恐らくはグレモリー家固有の紋章であり、リアスが述べていた刻印なのだろう。部室の床に刻まれている自分よりも一回り巨大な魔法陣もまた紅に輝きを示し応じた。準備が整ったのだと未だ他人事のように一誠は作業風景を眺める。

「じゃあ、イツセー。魔法陣の中央に立ちなさい。……：……：貴方はその魔法陣を通って召喚者の前に現れるのだけど、到着後に関する事は頭に入ってるわね？」

「依頼者の願いを聞き、支払える範囲内の契約を結び、そして代価を頂戴する。覚えていますよ、リアス部長」

「ふふ、やる気に溢れてるわね！ イツセーの手腕に期待しているわ！」

魔法陣の光が強まった。加速しながらレールを滑り降りていくジェットコースターのように、真つ逆さまに落下していく感覚だった。ある程度でそれは止まり今度は上昇していった。光が無くなっていき影が見える。悪魔召喚は昨今のゲームでシステムとして盛んに採用されており一誠もまたそのようなゲームをプレイした経験がある為に、自身が悪魔側となり魔法陣を潜る事にロマンを感じていた。

初めての仕事だし景気付けに格好良く口上を述べよう。彼はそう思い気に入っているキャラクターのポーズまでも真似た。そして目の前に現れた人影は、眼をパチクリさせ驚きを隠せていないリアス達であった。混乱する一誠に苦笑いを浮かべる朱乃が補足説明を追加した。

「魔法陣による転移は一定魔力が必要なのですが……。どうやら魔力が少なすぎて魔法陣が反応しないようですわ」

「前代未聞だけど自転車で行ってもらうしか無いわね」

リアスが壁に描いた術式は物体を転送する効果を持つらしくスポーツ用自転車、依頼

人の住所が記された地図の二つが吐き出された。直訳するまでもなくコレで行けという事なのだろう。格好良く召喚されようとした自分を殴りたい衝動に耐えながらも一誠は床に投げ出された自転車を無言で起こした。仲間達の生暖かい視線を背中に受けながら彼は渋々とオカルト研究部の部室を後にし、依頼人の元へと自転車の鼻先を向けた。

書かれている住所へはまだ遠い。皮肉げに笑いながら一誠は脚に力を込めた。



キーコキーコと錆びついた金属音を鳴らす事、二十分。一誠は漸く依頼者のアパートに辿り着いた。悪魔に転生しているから体力は消費していないが精神はかなり削り取られている。

これで契約を取れなかったら何の為に自転車で乗ったのか解らなくなってしまう。せめて契約だけはおぎ取ろうと意気込みながら二階へと階段を上がった。一番奥の部屋が今回の依頼人だ。ドア横に備え付けられてあるインターホンを押して、少し強引に扉を叩いた。遅れて隙間から顔を出した依頼者はやせ形の若い男である。

招き入れられると最初に眼を見張ったのは膨大なフィギュア達だ。ショーケースに飾られ更に未開封の状態で幾つも整理整頓されていた。押し入れには何が詰まっているのか非常に気になるが、今はグレモリーの悪魔として此処に來ている身。心を鬼にして依頼内容を訊ねた。

依頼人の森沢さん曰く、『境界線上のアリア』について語り合う同志が欲しいとの事だ。タイトルを聞いて一誠は直ぐに閃いた。境界線上のアリア、と言えばライトノベルの金字塔と謳われる小説で、完結から数年が経過した今も尚語り継がれている伝説のラノベだ。

一誠もフアンの一人であり初版や特装版まで所有している。何せあの雑誌オリジナル目覚まし時計もアリア特集号の際に購入した業界誌のプレゼントなのだ。どうやら最初の仕事としては当たりらしい。二人は意気投合し、それからお気に入りのキャラクタ―について思う存分語り合った。

数時間後、一誠の気分は明るかった。限定フィギュアを代価として契約が成立したからだ。内容はこれから定期的に観賞会や意見交換を行うという物で彼は口笛を吹きながら自転車を進ませていた。



「契約は取れたし、これでリアス部長も喜ぶだろ」

高評価の描かれたアンケート用紙が彼の懐を暖めていた。あの妙に威圧的なリアスもこれで少しは見直すだろう。自分が気にしすぎているだけかもしれないし彼女本人はその自覚が無いのかもしれないが、リアスが高圧的な態度を取っているように一誠は思えた。

一応命の恩人で主君だから従っているがどうやら中々相容れないらしい。その時、綺麗だった夜空が歪んだ色に塗れた。シャボン玉のような歪みだった。月を背景に翼を生やした女性が浮かんでいた。

この嫌な気配は、レイナーレと同じ。そう、墮天使だ。女は忌々しそうな眼で一誠を見ていた。手には一本の光の槍が握られている。戦闘体制は整っているようだ。

「誠に妙だ、何故貴様は生きている。貴様はレイナーレ様が殺した筈だ!!」

「おいおい、またレイナーレかよ。——だが、今度ばかりは簡単に殺されないぜ?」

仮に背を向けて逃げ出しても貫かれるし、この様子だと町の住民を人質にする可能性も捨てきれない。

ならば敢えて正面から戦いを挑むように見せ掛けてリアス達の応援を待つ。それが一番ベターな作戦だと彼は決定した。今の自分が何処まで渡り合えるのか。それを確認したいと一誠は思った。

深夜の住宅街にて、墮天使と悪魔の戦いは静かに始まろうとしていた。

## l i f e . 9 鱗

閑静な住宅街で彼等は互いを警戒していた。墮天使には余裕、一誠は焦燥が見られた。この戦いは彼にとつて紛れもなく初戦であり、対して墮天使は言動からして戦鬪経験も豊富なのだろう。神器という切り札を持っていても緊張は抑えられなかった。心なしか息が荒くなつていた。彼女は一度翼を大きく広げ、高速で槍を投げる。それが戦鬪開始の合図となつた。

あの時と違い一誠の眼にもハッキリと迫り来る槍が見えていた。自転車を踏み台として左に身体を転がす。動体視力も脚も思うままに動いた。反射では無く自分の意思で回避に成功したという事実は一誠を奮い立たせた。地面に深く突き刺さる槍には眼もくれず、墮天使は彼の左手に注視していた。今の一瞬、彼の左手に見えた刻印は公爵グレモリー家。つまり兵藤一誠は悪魔に転生したという事である。

厄介な事になつた、と彼女は内心で舌打ちした。一誠は上司であるレイナーレに殺された筈の人間。それが生き延びて挙げ句にグレモリーの配下になつている等墮天使は

知らなかった。

早急に報告しなくてはならない、だがこのまま背を向けて帰るのも癪に感じた。今の彼は転生して間もない。力の使い方を把握出来ていない筈だ。彼女は光の槍をまたも形成した。今度は本気で造り出した高密度の槍。最初は上手く避けられたが流石に二度とはいかない。墮天使の意地にかけて必ず抹殺してやるのだと力を込めた。

だが彼女は一つだけ忘れていた。兵藤一誠が何故に殺害の標的となったのかが頭から抜け落ちていたのだ。普段ならこんな初歩的なミスはしないが、相手が元人間なので無意識に油断していた。思い出した時には既に遅すぎて、自分の口は勝利を確信した叫びを放っていた。異常な光が一誠の左手から沸き上がる。

『眼を閉じて一番強いと思う者をイメージして。なりたいたい、と憧れる存在に自分を重ね合わせるのよ。そうすれば——』

リアスが告げた説明を一誠は心の中で何度も繰り返していた。墮天使の力量は今の槍である程度は把握した。考えた策は神器を使用し早々に決着をつけるという物だ。彼女は自分よりも多くの戦いを経験している。油断している今この時、全力を叩き付け

るしかない。

なりたい自分は誰よりも強く、それでいて優しい男。憧れる存在は境界線上のアリアに登場する主人公にして英雄王、ナアガ・スピリタス。たった一人の女性を救う為だけに百万の軍勢に飛び込んだ最強の英雄だ。

俺は王女様専属の英雄になった時から、諦めないと決めている。彼の名言は熱く胸に残されている。自分もこうありたい。フリードの為なら全てを投げ出せる男になりたい。だからこそ、こんな所で立ち止まる訳にはいかなかった。

「セイクリッド・ギア神器!! 墮天使を倒せるだけの力を! フリードを護れるだけの力を俺に貸

せえええええええ!!!」

神器は所有者の想いの力を糧に進化していく。ある程度の知識を持つ者にとっては最早常識であり、一誠は知ってか知らずか条件を満たしていた。左腕が赤い鱗に呑み込まれ龍に変化を遂げた。その姿は前と細部が異なっている。

牙のような装飾は消え去り全体的に洗練されたスタイルに姿を変えていた。荒々しい龍を象った刻印が腕を覆い、宝玉が濃いエメラルドに輝く。完全に出現した龍の腕は

真っ直ぐ墮天使を捉えていた。

身体の奥底から無尽蔵に込み上げる暴力的なエネルギーは神器が想いに答えた事を教えていた。宝玉から機械的な音声が聞こえ、同時に身体能力が底上げされていく。

『Boost!!』

「神器!? それも倍加………!」  
トゥワイス・クリティカル 龍の 手か!! だが、たった一度の倍加でこのカラ  
 ワーナを倒せるとでも——」

視界が回転し、続きは言えなかった。気付けば冷たいコンクリートに倒れ伏していた。鉄の味が口に染み渡る。遠くに拳を握り締め肩で息をしている彼が眼に入った。頬が痛み、そこで漸く殴り飛ばされたのだとカラワーナは理解した。

見えなかった。倍加を知らせる音声が聞こえたと思った瞬間に彼女は回転させられていた。強く打ち付けた頭を抑えながらゆっくりと立ち上がった。

もう元人間だと嘗めてかかる愚行は出来ない。咳き込みながらカラワーナは槍を造ろうとして、そこで考えを改めた。此処で一誠が踏ん張っているのは応援を待っている

からだど気付いたのだ。援軍が来れば光の槍という優位性を持ってしても殺されるのがオチだ。

それよりは今の内に退却し、レイナーレに報告をする方が良い。黒い翼を開いてカラワーナは夜空に浮かび上がり、全速力でその場を後にした。

彼女が去った直後に魔法陣を通してリアス達が駆けつけた。墮天使の気配を察知して、心配したのだろう。一誠から事情を説明されて全員が驚いていた。転生したての悪魔が墮天使を撃退したのだから驚くなど言う方が無理だ。リアスは優しい微笑みを浮かべ、それから神器に眼を移した。想いの強さによって姿を変えた神器。この短期間で進化を促す程の彼の想いは一体何なのか。彼女は少し気になりつつもじつと龍の腕を見ていた。



潜伏している教会に帰還したカラワーナは報告を行うべく上司レイナーレの部屋に歩いていた。計画成功の為にグレモリーに介入されてはならない。

焦りから少々急ぎ足となり、その途中で同僚のドーナシークとすれ違う。あの時一誠を仕留め損なった馬鹿。こいつのせいで私は苦勞している、と苦々しく思いつつも通り過ぎ目的である彼女の部屋に辿り着いた。ノックをして許可が出されると礼儀に気をつけながら扉を開いた。

それで、どうかしたのかしら？ レイナレは訊ねる。

「つい先程、兵藤一誠と接触しました。神器は龍トウワイス・クリテイカルの手です。私個人としては警戒をした方が良いと思いますが」

「ふうん。……………そんな下級神器、放っておきなさい」

「……………了解しました。レイナレ様」

報告を終えて退室したカラワーナの顔にはやりきれない思いがあった。自分の感じたあの魔力は下級悪魔の比では無かった。中級、少なくとも上級クラスにまで上昇していた。だがレイナレは何の対策も講じようとせず、爪の手入れに夢中である。墮天使勢力は絶対的な身分制度故に逆らえないが、明日からは独断で警戒を強めよう。



カラワリーナはそう決意し階下から微かに聞こえてくる苦悶の声に耳を貸さず、自室へと戻った。

## life. 10 所有

墮天使カラワーナとの戦いから一夜明けた、水曜日。午前九時。一誠は眠らないように全身全霊の力を込めていた。昨夜の疲れ、太陽の光、科目が苦手な数学と謀ったかのように揃った三拍子は彼の脳に催眠術をかけていた。

女子からの株は上昇しても頭の度合いは変わらない。もし一度でも寝てしまう事があればこの先の授業が理解出来なくなってしまう。そうなればフリードとの再会どころの話では無い。

一誠は彼女の笑顔を思い浮かべながら黒板とにらめっこをひたすらに繰り返していた。仮に一時限目を気合いで乗り切っても次は体育、そのまた次は物理。更に日本史と続くのだ。半ば自棄になりながら一誠は授業を受け続けた。



今日は三年生の一回目の進路懇談であり他学年は午前中での帰宅と事前に通知され

ている。四時限目終了のチャイムが鳴り響いた瞬間にクラスメイト達は洪水のように出ていった。だが全力を使い果たした一誠にはとても人の波に揉まれる元気は残されておらず、もう少し人が居なくなったら下校しようと思いを埋めた。そうしてグースカと寝ていた彼が眼を覚ましたのは午後三時。実に二時間近くを教室で寝ていた計算となる。

今夜も悪魔稼業がある事を思い出し、急いで荷物を纏め、帰路に着いた。

「ああ、未だ眠いな……。家に帰ったら仮眠でも取るか」

そうでないとは身体が持たない、と愚痴りながら歩いてきた一誠は何時の間にか例の公園にやって来ていた。フリードと出会ってから下校時はこの噴水前を通ると決めていた。疲れきった状態でも身体は忘れないらしい。暖かな春に喜ぶ、瑞々しい木々を眺めながらコンクリートで固められた遊歩道を進んだ。

数分もしない内に一誠は噴水に辿り着いた。今日もやはり彼女は居なかつた。

無駄足であつた事を嘆き踵を返したその時、近くに設置されたベンチが眼に入った。一瞬白色が映つたと立ち止まって凝視し顔は綻んでいった。

座っていた人物がフリードだったからだ。喉を弄くつて、然り気無く近づく。彼女も此方に気付いたようで俯かせていた顔をサツと上げた。咄嗟に笑顔を作る。涙を隠したように一誠には見えたが何も言わずに言葉を綴った。差し当たりの無い、なるべし無難な言葉を選択した。

「えーと、こんな所で何をしているんですか？」

「気分転換です。少し疲れましたから」

「お仕事、大変でしょう」

頭が割れそうな痛みが一誠を襲った。フリードが首からぶら下げている十字架が原因だ。少し視界に入れただけで凄まじい悪寒と頭痛を感じる。恐らくは警告なのだろう。これ以上彼女に近付くなど悪魔の本能が訴えかけているのだ。深入りするなどいう意味の甲高い鈴音が尚も叫んでいるが一誠は気に止めなかった。

シスターだから悪いのか。悪魔に転生したからなのか。それでも自分は彼女が好きだと断言出来る。平静を装い彼女に不安を感じさせないように一誠はただ痛みを我慢

した。

それにしても、久々に見るフリードはやはり美しかった。思い出に生きる彼女よりも美しく時折見とれながらも話を続けた。話をして解った事はフリードは職場でストレスを抱えているという事だ。

いや、何かに怯えていると言つても良い。他の話題、例えば互いの日常等他愛ない会話には見られないが、いざ教会の話となると彼女は酷く震えた。呼吸も大幅に乱れていた。

一体教会に何があるのか。彼はいよいよそれについて探つていこうとしたがその直前に大きな泣き声が聞こえた。フリードはそちらに意識を向けてしまったので一誠は内心で泣き声の主に文句を言いながら、同じく声のした方向に視線を向けた。見てみると子供が一人、膝を擦りむいて泣いていた。

すると彼女は立ち上がり、スタスタと子供に近付いていく。嘩然としながらも追いかけて一誠は驚いた。フリードの両の中指にそれぞれ銀色の指輪が現れ、翡翠の輝きを放つていたからだ。光に当てられた擦り傷は何事も無かったかのように消えていく。やが

て完全に消え去ってしまった。子供が礼を言いながら走っていく様子を見届けながらフリードは自虐的に告げた。

「頼みもしないのに神から渡された治癒の力。生まれ持った、異形。……嫌になりますよね」

その言葉に思わず左手を握り締める。彼自身も力を持つて生まれた一人。その力が何れだけ人生を狂わせるかは他ならぬ自分が良く知っていた。神器は良い事だらけでは無い。殺される事も当然あるだろうし、迫害だつてされてしまう。

人間は何時だつて異常を嫌悪する存在だ。一誠は運良く悪魔の眷属になれたが、このようなケースは本当に稀なのだ。大抵の神器所有者は力に気付かないまま死亡するか、迫害を受けて殺されるかの二択しか無い。フリードもまた迫害を受けてきた人間だと一誠は悟った。

でなければ、あんな悲しい眼は出来ない。彼は言葉を詰まらせた。

「俺は、その——」

「ふふ、解っていますよ。少し困らせてみただけです。しかし今見た事は他言なさらぬように……………」

フリードは去っていった。彼は何も言えず、後ろ姿を見つめているだけだった。彼女の眼に垣間見えた過去は今の自分が踏み込んではいけない領域なのだ。そう思いながら一誠はきつく左手を握った。

## life. 11 役割

何かを叩くような鋭い音が部室内に響いた。事の成り行きを朱乃を始めとする部員達は固唾を飲んで見守っている。叩かれた一誠は沈黙したまま顔を上げようとせず、拳を振るったりアスは息を荒くしていた。

暫くして落ち着きを取り戻したのだろう。一誠の赤くなった頬を彼女は撫でた。決して八つ当たりの類では無く彼の身を案じる故の行為だった。眷属には慈愛を持つて接すると評判のリアスが何故一誠を叩いたのか。それは彼がシスターと接触したからだ。

悪魔が教会に踏み込む事は当然ながら大きな問題となる。今回は何事も無くこうしてオカルト研究部の活動にも顔を出せているが、実際は何時光の槍が飛んできても可笑しくは無かったのだ。

「最悪の場合小競り合いになっていたかもしれない」と話すリアスの表情には既に怒りは消えて心配のみが残っていた。



「特に悪魔祓いの力は我々を簡単に滅ぼせる。つまり無に帰すの！ もう二度とこんな真似はしないで頂戴!!」

「……………すいませんでした、リアス部長」

ガミガミとまるでマシンガンのように連続して言葉を放っていたリアスはそこで一区切りをつけ、朱乃が注いだ粗茶を口に流し込んだ。熱くなりすぎた自覚はあったように髪を弄りながら誤魔化す。

一誠は肩を竦め反省したように演じていた。冗談では無い。注意された程度で止めるようなら恋をしていない、と彼は内心で小馬鹿にしていた。だがその感情を表に出せば面倒になるのは眼に見えているのであるべく顔を伏せて見えないようにした。それがリアスからは反省して顔を伏せているように見えたので満足そうに頷いた。

説教が終了した雰囲気を見逃さず、朱乃がここぞとばかりに前に進み出た。呑気な微笑みでは無く真剣な表情だった。

「朱乃、どうかしたのかしら?」

「はぐれ悪魔討伐の依頼が届きました。今夜中に片付けろ、との事です」

『はぐれ悪魔』。彼女の口からその単語が出た瞬間に皆の表情が固まったのを一誠は見た。言葉から想像すると文字通りはぐれた悪魔となるがリアスの様子から察するにそんな可愛い物では無いと彼は悟った。

朱乃が詳しい情報を読み上げていく中でリアスは一誠に説明を加えていく。

曰く、はぐれ悪魔は欲望のままに仕えていた主を殺害或いは逃亡した眷属悪魔、例えるなら野良犬のような存在らしい。人間や他の悪魔に害を加えるので見つけ次第討伐するのが悪魔稼業の一つ。

町外れの廃工場にはぐれ悪魔が逃亡した、と朱乃は淡々と告げる。空は黄昏を少し越えて黒みがかっていた。先ずはお手並み拝見だと思いつつ一誠も早速準備に取り掛かった。



空がすっかり暗くなった頃、リアス達は、はぐれ悪魔が潜伏しているという廃工場に  
来ていた。情報によると今回討伐するはぐれ悪魔はD級ランクはぐれ悪魔のバイサーだ。

因みに級ランクとは討伐対象の凶悪度、危険度、身体能力、魔力の四項目から決められる強  
さの目安である。『SSS級最重要消滅対象はぐれ悪魔』から『E級消滅対象はぐれ悪魔』の八段階まで存在し、  
その中でバイサーは下から二段目。まだ若いリアスや眷属悪魔になって日が浅い一誠  
でも充分戦えるレベルだった。

腐敗臭が広がっている工場内を彼女達は散策していた。リアスは悪魔について未だ  
説明が不十分だった点を補足しながら歩いていく。

「——先の三つ巴の大戦により純血の多くが戦死して、悪魔は軍団を率いる事が出来な  
くなくなった。そして開発されたのが『悪魔の駒イヴィル・ピース』よ。チエスの駒と同じように、眷属悪魔  
にそれぞれ異なる特性を授ける事で少数でも強大な力を発揮出来るようにしたの」

「チエス、ね。確か駒は王キングに女王クイーン、それに騎士ナイト。戦車ルーク、僧侶ビショップ。最下級は兵士ポーンでしたっけ。  
………それで、俺の役割は何ですか？」

「イツセーの場合は特殊で——」

話に夢中で何時の間にか広い倉庫に進んでいた。その時、リアスは気配を感じ取ったように口を閉じた。見れば他のメンバーも戦闘体勢に移行している。そうして準備が整った直後、奥に潜んでいた巨大な怪物はゆっくりと姿を見せた。

それは人間の上半身を持ち腰から下が獅子という異様な風貌だった。その姿はまさしく欲望に溺れた哀れな獣。はぐれ悪魔、バイサーは赤い瞳を輝かせながら重たい身体を動かした。

「ふん、悪魔の小娘が。生意気にも私を殺しに来た訳か」

「そうよ、はぐれ悪魔バイサー。グレモリー家次期当主。リアス・グレモリーが貴女を消滅させるわ。——祐斗ツ！」

「はいッ！——『ソード・パース魔剣創造』!!」

バイサーの前足を利用した一撃を木場は駆けながら避けていく。タン、と地面を蹴る

音よりも先に彼は風を切り走った。周囲全てを風ぎ払う爪も軽く捻っただけで木場は避けて見せた。

リアス・グレモリーが『騎士』。木場祐斗。捉えきれない俊足と鍛え上げられた剣さばきによつて繰り出される、不可視の剣劇。即座にバイサーの両腕を切り裂き更に次々と斬つていく様は主たるリアスの敵を排除する神速の騎士。

両方の腕を斬られたバイサーが怒り心頭で前足を落とす。標的は木場だ。あの重量級の太い脚が直撃すれば華奢な彼ではひとたまりも無い。しかし咄嗟に間に入り込んだ影があつた。

リアス・グレモリーが『戦車』。塔城小猫。高い耐久性で相手の攻撃を受け止め、並外れたパワーで怒涛の連続打撃を叩き込む。空中に跳びバイサーの脇腹に拳を振じ込む様は主たるリアスを敵から護り抜く沈黙の戦車。

肋骨と内臓を機能停止に追い込まれたバイサーはその半身が、自身の攻撃で造つた大穴に埋まっていた。顔だけを上げて睨むが顔前に朱乃が降り立つ。

リアス・グレモリーが『女王』。姫島朱乃。騎士、戦車、僧侶、兵士。全ての駒の力を兼ね備えた頼れる副官にして、迸る雷で敵を殲滅する生粋のサディスト。幾多の魔法陣

から雷を走らせバイサーを焦がしていく様は主たるリアスを影から補佐する無敵の女王。

朱乃の雷を浴び続けたバイサーは最早喋る事すら出来なくなっていた。崩れ落ちる彼女にリアスは顔色一つ変えずに宣告した。それに対する答えは返されなかった。バイサーは諦めたように眼を瞑り、リアスは右手に魔力を集結させる。

近付いただけで吸い込まれそうな紅の魔力。勢い良く放たれた魔力球は悲鳴すらも巻き込んで、バイサーをこの世から消滅させた。一誠は息を呑んだ。これが悪魔の戦いであり、この中で彼は高みを目指していく。恐ろしくもあるが面白くもある。これからどんな新しい事が待っているのか楽しみだった。

そう言えば、と彼は未だ自分の役割を聞いていなかった事を思い出した。果たして自分の駒は何なのだろうか。

「ああ、イツセーの役割は——」

「——<sup>ポーン</sup>兵士よ」

一番下級であつた事にショックを受ける一誠と苦笑しつつも優しく見守る仲間達。ヘナヘナとその場に倒れる彼にリアスは呆れながらも微笑んだ。

リアス・グレモリーが『兵士』。兵藤一誠。彼が自分の左手に宿る力を知るのは、もう少し先の事である。

## life. 12 視界

木曜日。何時ものように兵藤一誠は悪友と雑談に興じ、女子達からの熱烈なアピールに愛想笑いを返したりで今日もそれなりに楽しい一日を過ごしていた。昨夜のはぐれ悪魔討伐の一部始終を眼にしてから日常を大切に過ごすように彼は心がけた。道を踏み外せば自分も醜い怪物に成り果てるのかもしれない。

勿論フリードに欲を求める訳で無いが、これから先もしかすれば堕ちてしまう可能性もあるだろう。だからこそ今を出来る限り生きようと一誠は思った。

放課後となり彼は悪魔稼業に精を出す。先ずは自転車の整備から始まり、チラシを家々のポストに配達し、それから依頼者の元に飛んでいくという一連の作業だ。

早々と配達を終わらせ汗を軽く流した後で今夜の依頼者のチェックを専用デバイスで確認する。依頼者のデータが全て登録され必要な時に情報を呼び出せるこのデバイスは悪魔にとって必要不可欠な品で新人は操作方法の早期習得が必須。一誠も最初は戸惑ったが手持ちのスマートフォンと操作がほぼ同じだった事もあり既に使いこなせていた。



パネルに触れていくと今日の依頼者の情報と住所が表示された。皆に見送られながら、彼は部室から出ていった。



依頼者の家は駒王町の端に位置しており自転車でそれなりの時間が必要となった。見えてきたのは小綺麗な一軒家。

自転車を表に止めインターホンを押そうと玄関に近付いた時、一誠の鼻を妙な臭いがくすぐった。生臭い肉の臭いだ。外観からしてゴミ屋敷という訳でもないのに何故こんな臭いがするのか。それに施錠もされずドアは開け放たれている。

嫌な予感があった彼は靴のまま家に飛び込んだ。廊下を真っ直ぐ走り抜けた先にあるリビング。異臭の原因はそこにあつた。

「ひ、人が死んでる……!?!」

バケツをひっくり返したかのように床にぶちまけられた血溜まり。恐る恐る視線を上に向けていき血の主と眼が合った。手足に光の槍を刺され逆十字に張り付けられた上に内臓を抉り出された男がずっと一誠を見ていた。苦悶、無念の表情は未だ生を謳歌している彼を怨めしげに見つめる。

パチパチパチ、と場に似合わない拍手が静寂を壊した。急いで振り返った一誠の視線に映ったのは紺色のコートを着用した紳士。かつて自分を殺そうとした顔には見覚えがあつた。

「……………墮天使!!」

「久し振りだな、悪魔の小僧。再会を祝してワインでも飲むかね?」

墮天使ドーナシーク。彼がこの惨劇を引き起こした事は最早明らかだ。沸いてくる怒りを感じながらも一誠は落ち着きを取り戻すべく深呼吸した。普段なら殴りかかっているが、今回は相手の正確な人数を把握していない。加えて相手は自分の弱点である光を手足の如く操る墮天使だ。これまで同様無闇に突っ込んで返り討ちにあうだけだ、と一誠は冷静に状況を分析し、奇襲の機会を待つ事にした。

だが彼ががむしやらに向かってくると思っていたドーナシックは面白くなかったのか光の槍を出現させる。またあの笑みを浮かべていた。

「戦わんのか、小僧。ならば、——死ね!!」

「また墮天使かよ………!!」

彼の手元が光を放った瞬間に一誠は身を屈めた。槍は張り付けられている依頼者に突き刺さり嫌な音を漏らす。咄嗟に床を蹴り、側に置かれていたテーブルを勢い良く放り投げた。テーブルは大きく回転しながらドーナシックの視界を奪った。一瞬だ。昨日のはぐれ悪魔討伐時に木場が見せた軽やかなステップ。駒が違うので上手くは無いが確かに墮天使との距離を縮めていく。左手に赤い鱗が生えて、龍の腕に置き換わった。

神器、トウフェイス・クリテイカル龍の手だ。墮天使カラワーナとの戦闘時に名前と能力が判明した、一誠の身体に宿った神器。宝玉が雄叫びを轟かせ使い手の力が倍になった事を示す。

テーブルに気を取られたドーナシックは反応が遅れた。慌てて翼を広げようとする

も狭い室内では充分に飛ぶ事が出来ない。迫り来る一誠の拳。ならば、と翼を仕舞い回避行動に移ろうとするが身体が動かない。羽根の一部が電灯に引つ掛かったのだ。

今さつき自分が殺した、この家の主が視界に入った。血塗れで良く見えない顔は一矢報いたかのように笑っている。

もう避ける術は残されていない。かくなる上は全力で防御するしかないと彼は齒軋りした。半ば浮いているので力が入らない。この状況でまともに喰らえば骨折は免れないだろう。何かが激しくぶつかり合う音がして、ドーナシックは思わず眼を瞑った。だが痛みは無い。そつと眼を開けると目の前は白一色だった。一誠の苦痛な声が響く。

「……………何故だ、何故此処に居る!!」

「……………」

信じられなかった。何故、彼女が立っているのか。それだけでは無い。必殺の拳を放とうとしていた龍トウワイス・クリティカルの手を右手に握り締られた光の剣で受け止めるその姿は墮天使を護っているように見えた。つまりドーナシック、引いては墮天使の仲間。一誠の視界

が滲む。それだけ信じられない、信じたくない相手だった。

「何故だ！」

「——フリードさん!!」

「……………ツ!!」

黒雲が閃光を落とし雨がリビングの窓を叩く。雷に浮かび上がった姿はあの日出会った、白髪色白の美しい少女。フリード・セルゼン。

崩れていく天候は二人の心境を表していた。

## l i f e . 1 3 涙

天気予報は曇だと言っていたが信じるべきでは無かったようだ。依頼者の家に来る時に既に集まっていた黒雲は、よりによつてこのタイミングで雨を降らした。外の冷たい空気が開け放たれた玄関から入り込み一誠の体力を奪っていく。彼の身体が小刻みに震えた。

一誠が震えている理由はそれだけでは無かった。ドーナシックと自分の間に割り込み、拳を受け止めた存在。フリード・セルゼン。絶望を隠そうともせず彼女の赤い眼を見つめた。

やつとの事で電灯に引つ掛かっていた羽根を解放出来たドーナシックはこれまでと違い余裕の表情で、ゆつくりと自身を守ったフリードに近付く。「私とした事が彼女の存在を忘れていた」と馴れ馴れしく肩に手を回しながら、それでも彼女は拒否する姿勢を見せない。顔を伏せ屈辱に耐えていた。

トウワイス・クリティカル

龍の手に再度力を込める。愛するフリードの身体を弄ぶ変態墮天使に鉄槌を加える為だ。しかし彼女は横に首を振った。直後、全身の力が抜けていくように一誠は感

じた。下卑た笑いをドーナシックは浮かべる。

「良くやった、フリード。報酬として今日の調教は何時もの倍にしてやろう」

「……………ありがとうございます」

ハッキリと聞こえた。墮天使の言葉も、フリードの悲しみも全て。彼は今でこそ矯正されているが昔は超がつく程の変態だった。そうでなくとも多感な思春期だ。否が応でも彼等の言葉を理解してしまった。愛した人は既に墮天使の玩具にされている。

なんとという事だ。もっと早く救出に向かっていたら、とひたすらに自分を責めた。そのせいで彼女は苦しみを味わっているのだ。

だが未だ希望はある。此処でフリードを連れ戻す事が出来れば或いは。

「やるしか無い、か。——最悪死ぬかもな」

ドーナシックを全力で殺し、その後でリアスが事態を察知する前に墮天使の拠点を襲

撃すれば何とかなるかもしれない。荒々しい作戦とも言えない杜撰な計画。成功する確率は一桁も無いだろう。

そもそも最初からして無茶苦茶だ。実力で敵わない墮天使を一人で倒さなければならぬ等無謀極まりない。だが少なくとも彼を突破しない事には話にすらならないと言えた。

暫くフリードの身体を撫で回していたドーナシックだが満足したのか少し距離を置いた。光の槍を造り出し一誠を睨む。

三人は沈黙した。神器、槍。武器を構え、そして一誠とドーナシックは互いに駆けた。

乱雑に振り回される光の槍。少しでも触れればそれだけで致命傷になりかねないが

一誠は龍トウワイス・クリティカルの手を盾として構える事で、回避では無く敢えて正面から受け止めた。

彼自身も何となく気付いていたようだが龍トウワイス・クリティカルの手は文字通りドラゴン系統の神器。

発動している間一誠の左腕はドラゴンの鱗で覆われている為に悪魔の弱点は無効になるのだ。当然光の槍も効かなくなる。

「馬鹿な、光の槍が………ッ!!」



「この腕は龍の腕!!」ドラゴン 光が効くかよ!!」

無論、何時までも無効化する訳ではなく、何度もぶつかれば光は鱗を焦がし体内に浸透してしまう。完全に回ってしまいう前にドーナシークを殴れば良い。直後に強化された身体能力を駆使して墮天使に詰め寄る。彼を殴る事だけを考え脚に意識を集中させた。世界が遅くなったように一誠には見えた。

焦りからかドーナシークは大振りな攻撃を仕掛けるが、隙が大きくなるだけで当たりはしない。空き手にも槍を出現させるが意味は無かった。ただ生み出しただけでは補う事は出来ないのだ。

その時、彼はふいに体勢を崩した。血溜まりだ。勢い任せの攻撃に圧され足下まで見る余裕が無かったからだ。その一瞬を見逃さない。大きく飛び上がり、拳を振りかぶった。

勝利だ。その場に居る全員がそう確信した。

『RESET!!』の音声を聞くまでは。

脚が満足に動かなくなり地面に倒れ込んだ。使い手の力を倍にする時間が終了したのである。ドーナシックにばかり意識がいつて、失念していた。役目を果たした神器は鈍い輝きしか見せない。

目の前に彼は立っていた。余裕を取り戻したのか笑いながら槍を顕現させる。完全に詰んでしまった。しかしそこでドーナシックは動きを止めた。

視線は一誠の前に立つ彼女に向けられていた。憤怒の表情でフリードに問う。

「…………フリード。自分が何をしているのか解っているのか。悪魔エクソシスト祓いが悪魔を庇うとは正気の沙汰では無いな」

「確かに彼は悪魔ですが、——貴方よりは遥かに優しいです。どうして見殺しに出来ません」

「…………レイナー様からは殺さないように念を押されているが、殺さなければ問題無

いだらう。餓鬼を始末した後で貴様は——」

言葉は最後まで紡がれなかった。突如として床に魔法陣が展開されたからだ。眩しい紅の光に包まれて降り立った影。良く見知った顔だった。思わず顔が綻ぶ。オカルト研究部のメンバーが援軍に来てくれたのだ。

木場、朱乃、小猫。これ程心強い事は無い。急激に襲ってきた疲労から壁に身体を預けた。後は僕達に任せてくれ、と木場は笑顔を向けた。

思わぬ乱入者にドーナシックの顔が歪んだ。幾ら堕天使と云えど流石に三人を同時に相手は出来ない。今度は逆に彼が劣勢に立たされる番だった。

最後にリアスが姿を現して魔法陣は消え去り、オカルト研究部は全員揃った。リアスは絶対零度の視線で堕天使を睨んだ。眷属に慈愛を持つて接する彼女は自分の下僕が傷つけられる事を何よりも嫌う。下手人と思われるドーナシックに怒りを覚えながらも冷静を心掛けた。今焦りに身を任せるべきでは無い。

更に転移術式が床に浮上する。それも堕天使特有の、翼が描かれた魔法陣。堕天使の増援だった。此処で争う訳にはいかない。朱乃に撤退の命令を下し、そこで一誠の隣に

座るフリードが視界に入った。恐らくは知り合い。いや、それ以上。

「部長、フリードさんも一緒に!! 彼女を見捨てる事なんて出来ません!!」

「……………イツセー。その少女は敵よ」

一誠を庇ってくれた事は理解していた。だが転移魔法陣は自分の眷属しか運べない。それにフリードは悪魔の天敵である悪魔祓エクソシストい。即ち彼女は置いていく事になる。だからこそ憎まれ役を演じた。冷酷な悪魔として。今の最善の策は退くことだ。

床に頭を打ち付け、彼は泣きじやくった。見捨てるしか方法が無いと理解出来てしまったのだ。また彼女を苦しませてしまう。何も言わないフリードを見た。澄んだ瞳は醜く歪んだ自分の顔を鏡のように映している。白い手が頭に触れた。母親が子供をあやすかのように、何度も何度も優しく撫でた。

逃がすまいとドーナシークが光の槍を手に迫ってくるが小猫が投げた椅子に足を取られ転倒する。撤退する機会だ。部屋に繋げられた魔法陣にメンバー全員が入り、光が増した。木場に身体を支えられながら彼はフリードの涙を見た。

一誠は叫ぶ。

「フリードさん、待っていて下さい!! 絶対助けますから!!」

その言葉を最後にリアス達は完全に消え去った。やりきれない想いを残して。

## life. 14 体温

一誠は熱があるかのようにフラフラと駅前通りを歩いていった。リアスから頭を冷やすように言われ、何の目的も定めずに彷徨くだけだ。フリードは敵だという彼女は正しい。所詮自分は悪魔だ。もしこれ以上を求めらるなら小競り合いでは無くなる。最悪戦争にまで発展してしまうかもしれない。

傷の療養を理由として彼は学校を休んだ。単位には未だ余裕があるので心配は無いが、やはり何時までも休学する訳にはいかない。休めたとしても三日が限界だろう。それまでに覚悟を決める必要があった。

時刻は十一時を少し過ぎていた。虚ろな眼で周囲を見渡しながら近くのハンバーガーショップに入った。一番安いセットを注文し、運ばれてきた品を持って窓側の席に座る。だが頼んだは良いものの食欲が出ない。堕天使に殺された依頼者が脳裏に浮かんだからだ。

そうでなくとも腹は空いていないのに、内臓が飛び出た死体を思い出せば余計に食欲

が無くなってしまった。手付かずのまま窓の景色を見た。平日故に人混みは少ない。

視線を戻そうとして、そこで「あ………」と呟いた。居たのだ。身体は勝手に反応しており一誠は無意識に外に駆けていた。笑顔が溢れる。

「フリードさん！」

フリードは何かに怯えるように彼を見た。声の正体が一誠だと解り安堵の息を吐く。立ち止まる彼女の手を引いて子供のように走り出した。急いで先程のシヨップに舞い戻り自分と同じセットを注文して、フリードを座席に座らせた。

ハンバーガーとポテト、ドリンクが乗せられたトレーを受け取りながら事態を飲み込めていない彼女の前に座る。食べ方の例を示す為に大袈裟に包みを取り払い大口で頬張った。始めて見る食べ物だったのだろう、フリードは驚いた様子でハンバーガーを手にした。

最初こそ恐る恐る口にしていたが、どうやら彼女も昼食を未だ食べていなかったらしく数分後には綺麗に平らげていた。余裕が出てきたのか窓の外を眺める。

彼女がドリンクを手にとっている間も一誠は思考していた。フリードを見つけたとき彼女は怯えていた。それも何かから逃げているようだった。思い出すのは昨夜の戦い。

あの後で自分を庇った罰則を受けた事は容易に想像がつく。もしや耐えきれずに墮天使から逃げてきたのだろうか。ならば匿うべきだ、と彼は即断した。リアスに保護して貰えればもう彼女が苦しむ事は無い。説得には時間を要する筈だ。納得するだけの材料を集められるのが勝負となる。

悩んでいる間にフリードはすっかり食べ終えてしまった。これからどうするか、と考へ込む彼の視界にゲームセンターが映った。

ハンバーガーショップの正面に位置しており自分自身も何度も遊んだ事がある馴染みの店だ。次の目的地が決定した瞬間だった。



ゲームセンター内部は大きく三つのエリアに分類されている。キャッチャーやレーズゲーム、アーケード等のファミリーゾーン。人気の高いメダルゲームゾーン。大人向



けカードゲームやパチスロが揃うカジノゾーンだ。

一誠達は入口から最も近くに設けられているファミリーゾーンに足を進めていた。初心者の彼女に配慮しての選択だ。このゾーンは直感でプレイ出来るゲームが大半を占めているのでその方面に余り詳しくないフリードでも充分に楽しめるだろう。一誠ははしゃぐ彼女に笑みを返しながら保護者のように振る舞っていた。

「ありがとうございます！ 私、一生大切にします!!」

「そう言われると嬉しいです！ 次はあれにしましょう!!」

キャッチャーで見事にゲットしたぬいぐるみを笑顔で抱えるフリード。テンションが上昇している彼は普段は目の敵にしているプリクラを指差した。以前ならなるべく視界に入らないように苦心しているそれが今日に限って自分達のキューピッドにも思える。甘い加工のなされた文字で堂々と天使を謳った幕が下げられていた。

パシャパシャと連続する音に驚いていた彼女も馴れたのか最後には可愛らしいポーズを決めていた。出来上がった写真はハートで飾り付けられ其々の名前が描かれている。切り分けた写真に写っている二人は間違いなく幸せだった。

時間は過ぎ去り夕日がコンクリートで塗られた路面を照らす。一日をたっぷり遊び一誠達は少々疲れていた。欠伸をしながらゲーセンを後にした。久し振りに外の新鮮な空気を吸い込む。昨日の事が掠れてしまう程に清々しい気分だ。無意識の内に公園に向かっていた。

暫くするとフリードはぬいぐるみを抱き締め泣き始めた。思わず自分が何かしてしまったのかと慌てながら訊ねる一誠に彼女は笑みを作った。眼は笑っていない。やがて公園に到着した時、フリードはゆっくりと自分の過去を語り始めた。

「……私は生まれてすぐ両親に捨てられ、教会で育ちました。慎ましくも幸せな毎日でした。そんな時にあの力が目覚めたのです」

「あの時、子供の怪我を治した……」

「ええ。あの治癒の力です。それが教会に知られると一躍聖女として祭られました。私も人を救いたいと治療に専念しました」

しかし周囲は彼女を『聖女』として特別視した。同年代の子供のように遊ぶ事も許さず毎日ひたすらに人を治癒するだけの生活。フリード・セルゼンは孤独だった。

そして運命は訪れた。教会に傷を負った悪魔が倒れていたのだ。心身共に疲れていた彼女は流れ作業のようにその悪魔を治療してしまった。一部始終を子供達が覗いていたにも関わらずに。

そこから先の転落劇はあつという間だった。今まで祭り上げていた周囲は手のひらを返したかのように冷たく当たり、聖女と崇められていたフリードは魔女と蔑まれ教会から追放されたのである。

全てを話し終えた彼女は冷たい笑いを浮かべていた。惨め過ぎた。

「墮天使に拾われた後も暴力を振るわれ、挙げ句に身体を好き勝手に弄くられる。私も心も身体も薄汚い魔女。それでも——」

言葉は止まった。一誠に抱き締められていたからだ。何も言わず辛い過去から守るようにただ抱き締めた。互いに何も言わないが自然と心が暖かくなる。手に力を込め

れば除けられる筈なのに抵抗しようとは思えなかった。否定して欲しかった、立ち去って欲しかったのに心は歓喜している。

ああ、とフリードはやつと理解した。自分はずっとこうして欲しかったのだと。一誠の体温に包まれながら彼女は、過去を洗い流すかのように涙を溢れさせた。



バサリ、と漆黒の羽根が堕ちる。美しい夕日を背に墮天使は二人を見下すかのように舞い降りた。

レイナーレ。一誠が悪魔になった原因であり、ドーナシークの言葉から察するに今回の騒動の首謀者。二対の翼を大きくはためかせながら光の槍を作り出した。一誠は咄嗟にフリードを庇う形で立ち塞がる。

時刻は宵に差し掛かろうとしていた。

## l i f e . 1 5 兵士

黒い翼を広げ優雅に降り立つ少女、墮天使レイナレ。顔は全く笑っておらず冷たい視線をフリードに浴びせる。ボンテージを着ているという事は最初から本気だ。

一誠は背後に庇う彼女の鼓動を感じた。早く乱れた心臓の音は緊張と恐怖に濡れていた。レイナレはフリードを一瞥した後に、人を馬鹿にするような笑みを浮かべる。それだけ余裕なのだろう。事実だからこそ一誠は悔しかった。

「教会を脱走したと思えば、まさか男を抱き込んでるなんて。悪魔祓いから娼婦にでも転職するつもりかしら。鬼ごっこは終わりにしましょう？」

「私はもう戻りません。それに貴女達は私を神器でしか見れない……………」

「……………あの男に何を吹き込まれたのか知らないけど、私は頼んでいる訳では無いの。——無理矢理にでも連れていくわ」

また光の槍を出現させた。ドーナシックとの戦闘では上手く受け止める事に成功したが彼よりも上位らしいレイナーレに通用するかは不明だ。いや、成功しない前提で戦うべきだと彼は断じた。失敗してお陀仏になりました、では笑い話にもならない。慎重に大胆に攻めよう。

ハッキリ見えるように一誠は左手を突き出した。指先から赤に染まっていき神器は現れる。現状唯一の打開策、トゥワイス・クリティカル龍の手だ。少なくとも神器をちらつかせれば迂闊に攻撃は仕掛けない筈。実際に彼女は驚愕したものの、そこまで脅威に感じた様子では無かった。

確かに神器を顕現させた事自体には驚いたが龍トゥワイス・クリティカルの手はありふれた神器。墮天使上層部には危険な神器を宿していると言われ保護或いは殺害を命じられたが蓋を開けてみれば、ロンギヌス神滅具どころかレア種ですら無い下級神器だ。見当違いも甚だしい。

レイナーレは暫く笑っていたが鋭く睨み付ける。散々にフリードを連れ回したであろう彼にはたっぷり礼をしてやろう。彼女は右手を伸ばして光を投げた。闇に一筋の線が走った。

「ドラゴンを、ナメんなッ!!」

「……へえ、少しは使えるようになったのね」

鈍い音と共に一誠は力任せに撥ね飛ばした。強引な荒業だが龍トウワイスクリテイカルの手で受け止めている辺りは彼なりにドラゴン系神器の特徴を活かしていると言える。初めて会った時から格段に強くなっていた。

しかし未だ餓鬼だ。レイナーレはおどけたように拍手を重ねた。感心したからであり、自信の表れでもあった。力を倍にしようとする詮は下級悪魔。至高の墮天使たる自分には勝てない。神器を考慮しても実力の差は明らかだった。嘲笑しながら彼女は告げた。

「フリード、大人しく下りなさい。さもないと愛しの一誠君を殺すわよ。——ミツテルト!!」

突如として二人の背後から槍が飛来した。予測していなかった故に反応が遅れる。咄嗟にフリードを突飛ばし、その代償として一誠は腹を貫かれた。肉を抉られながら地面に突っ伏す。茂みからゴスロリの少女が姿を現した。最初から隠れていたのだ。一

誠はレイナーレの単独行動と思ひ込み油断していた。

フリードは泣きながら神器、トワイライト・ヒーリング聖母の微笑を発動させる。両手が光輝き徐々に傷を塞いでいった。出血は止まったが失った体力までは回復出来ない。その上敵は前後に二人。

もう逃げられない、と彼女は悟った。瞑目しながらレイナーレの元に歩み寄る。自分が投降する事で彼の命が助かるなら安いものだ。

「それで良いの。今夜の儀式で貴方は消え去るのだから」

「フリードさん!! 俺は未だ戦える!! だから諦めないで下さい……!!」

転移の光に包まれるレイナーレ達。フリードは両手を捕まれながら笑顔を見せた。偽りでは無い、とびきりの微笑み。さようなら、と口は勝手に呟く。声は出なかつたが動きで察したのだろう、一誠は必死に左手を伸ばした。

拝啓。もう二度と会う事の無い人へ。涙で滲む彼に言っておきたい事が一つだけあ



ります。見知らぬ自分を大切にしてくれた、親切なあの人に。

「好きでした……………ッ!!」

それだけを告げてフリードの姿は途絶えた。一誠は魂を吐き出すかのように吼えた。自分の無力さが許せずに叫ぶ彼の瞳はまるでドラゴンのように凜猛な光を放っていた。



時刻は午後十時。駒王学園旧校舎。オカルト研究部が陣取っている教室ではリアスと一誠が睨み合っていた。愛する女性を救出したい。愛する眷属に死んで欲しくない。どちらも愛だ。

ただリアスの方が正論であり一誠はそれだけ分が悪い。それでも譲らなかつた。此処で動かなければ自分はこの長い時間を後悔し続ける事が解っていたからだ。悪くなる一方の空気をほぐす為に朱乃は二人に粗茶を出してクールダウンを促す。互

いに喉を酷使していたので直ぐに飲み干し、その後はずっと沈黙した。

今夜の儀式でフリードは消え去る。レイナーレの言葉が浮かんでいた。詳しい事情は不明だが殺されてしまう事は確かだろう。議論を交わしながらも一誠は時計を気にせずには居られなかった。

リアスは長い間瞑目していたが、朱乃が耳元で何かを呟くと表情を一変させた。彼女が差し出した書類を読みながら頷いていく。まさか監禁でもされるのか、と身構える彼にリアスは嘆息しながら口を開いた。

「イツセーは兵士ポーンを弱い駒だと思っているかもしれないけど、それは間違いよ。兵士ポーンには『プロモーション』という特殊能力があるの」

「『悪魔の駒』イーヴィル・ピースは実際のチェスと同じく、兵士ポーンが相手陣地の最深部に赴いた時に昇格する事が出来る。王キング以外の全ての駒に変化が可能なのよ。貴方は私が敵の陣地と認めた場所の最深部に足を踏み入れれば『プロモーション』出来るわ」

「例えば、——墮天使が潜伏している教会。彼処も敵の陣地よ」

それだけヒントを与えられれば誰だつて気が付く。暗に取り返してこいとリアスは言っているのだ。解き放たれた弦のように力が沸き上がってくるのを感じた。

「後は宜しくね」と部屋を出ていった彼女と朱乃を見送つた後で一誠は勢いよく立ち上がった。窓際に控えていた木場は手元に剣を造り出しながら横に立つ。

本当に死ぬかもしれないよ、と彼は真剣な表情で告げた。ちよつとした意地悪であったが一誠は振り向かず断言した。

「安い取引だ」

何処までも真つ直ぐで熱い。惚れた女性の為に敵陣に飛び込む等正気とは思えないが同時に求めた答えでもあった。木場は嬉しそうに頷く。この戦い、彼となら死なないかもしれない。何故かそう思えた。

一誠の肩を力強く叩きながら、「僕も戦おう」と彼は宣言した。今まで黙っていた小猫もまた二人の隣に並んだ。

「良いのか。木場、小猫ちゃん」

「君を放っておけない。それに、リアス部長にフォローを命じられたからね。君を無傷で本陣に送り出す事を約束しよう」

「……………二人だけでは不安ですから」

良い仲間を得た。瞳を涙が覆いそつと拭う。合戦前の涙は不吉だ。メンバーは揃った。こうなれば後はフリードを救出するのみ。武者震いをしながら一誠は左手を掲げた。

絶対に助けて見せるという誓いだった。

## l i f e . 1 6 憤怒

目的の教会は丘の麓に建てられている。梟が来訪者を歓迎する中で一誠、木場、小猫の三人は物陰に隠れて様子を伺っていた。廃教会だが未だ神の加護が生きているのか、近くに居るだけで悪寒が背中を走った。険しい表情で木場が凶面を取り出す。敵陣に攻め込む時の定石だ。

広げられた凶面に眼を通すと、教会自体の規模は小さく、大雑把に分類すれば聖堂と宿舎しか無い。

儀式を行うとすれば聖堂、それも人目に付きにくい場所を考慮すると地下倉庫が妥当だろう。その意見には残る二人も賛成だった。

凶面を見る限り入口から聖堂までの距離は短く、一気に駆け抜けられる。問題はその先だ。見張りの存在は火を見るより明らか。そこで時間を消費すればフリードが殺されかねない。如何に手早く倒すかが重要と言えた。それでも強硬突破するしか無い、と一誠は決めた。

裏口から忍び込んだところで結局は見張りどぶつかるのだから。寧ろ敵は裏口に來ると予想しているかもしれない。ならば敢えて正面から駆け抜ける。

作戦は決定した。木場は頷くと一振りの魔劍を造り出し扉を勢いよく斬り飛ばした。真つ二つにされた扉が力無く倒れた頃合いを見計らい教会内部に転がり込む。通路を抜けた先にそびえる聖堂には影が立っていた。何度も戦った墮天使、ドーナシークだ。一誠達を見回しながら光の槍を構える。

「これで三回目だな、小僧。フリードを取り返しに來たか。邪魔立ては——」

瞬間、彼は身体を貫かれていた。血を吐き出しながら自分を刺した異物を見る。赤い紋章が描かれた魔劍だ。床から生えた劍が内臓を巻き込み、更に何重にも劍はドーナシーク目掛けて迫った。胴体を縫われている為に避ける事もままならず墮天使は全身を切り裂かれた。最後の足掻きに支離滅裂な言葉を叫ぶ。

音もなく木場が彼の前に立った。これ以上の苦しみは無駄だと判断したのだ。スツと眼を閉じて手を翳す。主の命令を受けた劍は意思を持ったかのように動き獲物を見据え、首を一閃した。足下に転がる頭部に劍を突き立てながら、彼は怒りの表情で吐き

捨てた。

「――続きは地獄の死神相手に吼えているといい」

何度も一誠を殺そうとしたドーナシークの所業は木場も知っており、だからこそ容赦を加えなかった。幾らか落ち着きを取り戻した彼を横目に小猫は聖堂を見渡す。恐らくはこの地下に隠し部屋はある筈だが、入口が見当たらない。

意識を集中させながら二歩三歩と進み、祭壇の前で立ち止まる。すきま風に墮天使の嫌な気配が混じっていたからだ。得意の怪力で祭壇を横にずらすと地下への階段が口を開けていた。三人は息を飲み込むと階段を下りていった。



階段を下りると長い廊下が存在していた。天井から申し訳程度にぶら下げられている電灯は古いのか、チカチカと時折暗くなる。眼を押さえながら三人は進んでいった。小猫は一番奥を指差した。墮天使の気配が漂うからだ。

徐々に急ぎ足になりながら一誠達は奥を目指す。やがて重厚な扉が見えた。それな

りに年代が経過しているだろう古びたそれは侵入者を通すまいと固く閉じられている。警戒を重ねながら一誠は扉を押しした。

内部の様子が明らかになるにつれて彼の表情に焦りが見られた。左右に控える複数の悪魔<sup>エクソシスト</sup>祓い、十字架に縛り付けられたフリード。その隣で高笑いを繰り返すレイナーレ。

小さな魔法陣が苦しそうに悶えるフリードの胸元で光を放つ。

「フリードさん!!」

絶叫を絞り出す彼女に駆け寄ろうとするも悪魔<sup>エクソシスト</sup>祓いが道を塞いだ。怒りに震えながら殴り掛かろうとして、直前に木場が斬りかかった。「彼に手は出させないよ」と剣を振り回していく。小猫もその容姿に油断した彼等を殴り飛ばしていた。

害虫駆除は私達に任せて下さい、と彼女は告げた。二人なら大丈夫だ。自分よりも余程強い。木場と小猫に背中を預け一誠はフリードの元に駆け寄った。拘束から外して床に下ろす。憔悴しきった顔で彼女は自分を助けに来た一誠を見つめた。



「その女はもうじき死ぬわ。神セイクリッド・ギア器を抜かれたもの。……これで私は至高の墮天使になれた！ アザゼル様から寵愛を頂けるのよ!!」

「神セイクリッド・ギア器を返せ!!」

「上層部を誤魔化してまでこの計画を進めたのに、今更諦めるなんて馬鹿な真似はしないわ。後は貴方達を殺せば証拠も残らない」

叫ぼうとして腕に抱くフリードを思い出し咄嗟に堪える。彼女を庇いながら戦う事は不可能だ。一先ずは聖堂に引き換えし、それから善後策を考えよう。

しっかりと抱き抱えて振り替えるとあれだけ居た悪魔祓エクソシストいは軒並み床に倒れていた。全員が剣に貫かれて見ると木場が頑張ったらしい。二人はレイナーレの前に並んだ。

幾らなんでも無謀だと一誠は思わざるをえなかった。今の彼女は傷を癒せる神器を持つているし、レイナーレはドーナシックとは格が違う。それでも二人は動くように思った。優先すべきはフリードだと解っているが容易に仲間を置いていけない。

一誠は悩んだが振り返らずに通路へと身体を向けた。走り出す直前に彼は言葉を紡いだ。

「木場！ 小猫ちゃん！！ 上で待ってるからな！！ それと俺の事はイツセーと呼べよ！！ 俺達は仲間だからな！！」

それだけ言い残して一誠はフリードを抱え、脚に全力を注いだ。速く流れていく視界の端で木場と小猫は確かに微笑んでいた。

## l i f e . 1 7 最期

一誠は全力で廊下を走った。腕の中に抱えるフリードは身動き一つ取れず呼吸も小さくなっていく。もう猶予は無かった。一度目に通った時よりもずっと早く二人は廊下を過ぎ去り階段を駆け上がった。聖堂に転がり込むと近くにあった礼拝用の椅子に彼女を寝かせる。顔は土色で冷たい。気を抜けば直ぐにでもフリードが消えてしまうようだった。励ます為に一誠は強く手を握り締めた。

直ぐに取り戻します、と彼は立ち上がろうとした。だが直前にフリードが眼を開けたのに気付いき慌ててしやがみこんだ。虚ろな眼で一誠を見つめた。渴ききつた唇が動く。

「私、貴方が助けに来てくれて……。嬉しかった……」

「やり直せるなら……。私は貴方と……」

「……そんな悲しい事、言わないで下さいよ。また、遊びに行くんだ。ハンバーガー！  
ゲーセンも!! 未だ他にも楽しい所は……ッ!!」

言葉が見つからない。彼女は助からないと理解している。それでも信じる事は出来なかつた。心の奥底で一誠は否定していた。泣きながらフリードの肩を揺らす。死神が彼女の魂を連れていかないように守っているつもりだった。目の前が見えない。もう何回涙を拭つただろう、それでも止めどなく悲しみは溢れてくる。

フリードの手が一誠の頬に触れた。冷えきつた体温は彼女がもうすぐ死んでしまうという現実を突き付けていた。

「そうだ、松田と元浜にも紹介しなきゃ！ スケベなんだけど親友なんだよ！ 後はクラスメート！ 桐生、村山、片瀬!! 良い奴等なんだ!! 絶対、友達になってくれる——」

二人の顔が近付き、そして重なった。最初で最後。心からのキス。涙に濡れながら二人は互いを求めた。たつた何秒にも満たない愛が永遠に感じる。こんな形で唇を交わしたくなかつたと思ひながら、崩れていく世界の中でずっと触れさせていた。やがて彼女の頭が静かに落ちていく。

微笑みのままフリードは逝った。安らかで美しい顔は最初に出会った時と同じで、だが冷たかった。涙はもう果てていた。暫く手を握っていたが漸く死を認めて彼はただ立ち尽くす。その少し後で彼女に追い縋るように力の限り感情を吐き出した。何もかもが遅すぎた。

自分に力が有れば。もっと早くに出会えていれば。後悔しても足りない。

「あら、茶番は終わりかしら？」

元凶は祭壇の前に立っていた。つまらなさそうな欠伸をしながら手に指輪を出現させる。如何なる傷をも治療する神器、トワイライト・ヒーリング聖母の微笑。優しい翡翠の光を照らしていた。

「これで偉大なるアザゼル様のお力になれる」と熱弁する彼女を一誠は見なかった。

許せなかったからだ。レイナーレも、そして結局は守れなかった自分自身も憎かった。それでも自己嫌悪する前にやるべき事がある。左手は何時の間にか龍の鱗に覆い尽くされていた。血のように赤いそれは一誠を映し出していた。仇を取れと輝く。

返せよ、と一誠は呟いた。大袈裟なポーズで聞き返すレイナーレに彼は、——赤き龍の帝王は吼えた。

「フリードを返せよオオオオオオオオツ!!」

『Dragon Booster!!!』

宝玉に龍の紋章が浮かび上がり、力が全身を駆け巡っていく。強化された馬鹿力で殴りに掛かるもあつさり回避されてしまった。直線的で単純な打撃に当たる筈が無いが殴らずには居られなかった。

二度目の電子音が響き渡り渾身の一撃を放つもレイナーレはその場で避ける。彼女は翼を少しはためかせるだけで簡単に回避出来るのだ。

「一の力を倍にしても私には勝てない。元々開いている差は埋まらないもの」

鈍い音がして右脚に光が刺さった。肉も骨も全てが焼けていくが一誠は素手で槍を掴み取った。龍の鱗があるとはいえ強く握り締めれば当然耐えきれず、光は鱗を焦がし

て体内を蝕んでいく。口と脚から出血が止まらない。床は赤が染み渡っていた。意識は朦朧として立つ事すら許されない。力が抜けていき、膝を着いた。このまま戦えば死ぬ事は確実だ。ならば責めて一発殴つてからでないと彼女に申し訳が無い。

『Boost』と神器は告げた。静かに、しかし威厳ある声は二度三度と連続していく。

興味が無いという眼で見えていたレイナーレも続いていく倍加に、次第に恐怖を覚えた。一誠が所有している神器は龍トウワイス・クリテイカルの手の筈だ。自分の眼に狂いは無い。

「ならあれは一体何なのだろう。血を吐きながらも立ち上がる彼の後ろに見える――、

——赤いドラゴンはなんだ。

「ありえない……！ その神器は持ち主の力を倍にするだけの『龍トウワイス・クリテイカルの手』。……でも、この魔力の波動は上級悪魔！ いえ、それ以上!!」

「——プロモーション、女王クイーン」

敵地に侵入した時にのみ使用可能となる、<sup>ポーン</sup>兵士専用の特殊能力。<sup>キング</sup>王以外の全ての駒に昇格出来る彼が選択したのは最強の女王<sup>クイーン</sup>。

全能力を引き上げる代償として身体は今にも潰れそうな悲鳴を上げるが、そんな事を気にしてられない。ドラゴンの左手に全ての力を込めてレイナーレに向けた。持ち主の想いに応じるかのように、籠手は虹色の輝きを放っている。敵を取って見せろと告げているのだ。

ヒッ、と彼女は後ろに下がっていく。床に倒れ込みそれでも必死に後退るレイナーレを一誠はただ見下ろしていた。眼に映った者全てを塗り潰す威圧感に呑み込まれて、気付けば支離滅裂な叫びがレイナーレの口から溢れていた。

「ど、どうしてフリードを助けようとするのよ！ 貴方は関係ない赤の他人でしょう!?!  
何で……ツ!!」

或いは、それが本当の彼女なのかもしれない。大粒の涙を流しながら泣きわめく姿を見て、思わず一誠は声を出していた。



「そんなの、決まってるだろ……」

ドラゴンの腕が無慈悲なまでにレイナーレの顔を撃ち貫く。

龍の籠手は貯め続けた力を彼女目掛けて解放した。派手な音も一緒に振じ込んで咆哮と共に押し出す。レイナーレは壁に叩き付けられ、そのまま大穴をぶち抜いて外に飛ばされた。もう立ち上がれないだろう。

随分騒いってしまった。フリードに振り返るも彼女は起き上がらない。死んでしまったのだ、と一誠は眼を閉じた。

言い表せない虚無感が瞼に焼き付いていた。

## life. 18 祝福

力を使い果たし倒れかけた所を木場が支える。脚が震え今にも意識を失いそうな程に血は溢れていた。自分の事ながらよくレイナーレを倒せたものだと思議に思えた。神器は想いの力に答えて力を発揮するという点を考慮すれば、フリードを助けるという願いが一時的に限界を超える鍵となったのかもしれない。

知らぬ間にリアスと朱乃が隣に立っていた。転移したのだろうかそれでも良かった。倒したみたいね、とリアスは満足げに告げた。

「間に合いませんでしたけどね……………」

「……………そう」

彼女は目を伏せた。リアスも表向きは反対していたが内心は助けたかったのでは無いだろうか。それが出来なかった理由はグレモリー家次期当主の立場が邪魔をしたからだと一誠はそう予想した。

その時、小猫がレイナーレの首根っこを掴みリアスの元に持ってきた。意識は戻っていたようだが壁に叩き付けられた衝撃で身体が未だ動かせないのか、悪魔に囲まれた彼女は酷く怯えている。「ごきげんよう、墮天使レイナーレ」とリアスは睨み付けた。そして懐から二枚の黒い羽根を取り出す。

レイナーレは見覚えがあるのか、途端に顔を青ざめた。

「貴女の計画に加担していた墮天使。カラワーナ、ミツテルトの二人は私が消し飛ばしたわ。残るドーナシークは………、あの状態を見れば一目瞭然ね」

「以前から墮天使達が何かを企んでいるのは察していたから、貴女の部下とお話をしたの。ミツテルトはお喋りな性格のようね。独断専行だと吐いてくれたわ」

どうやら裏で動いてくれていたらしい。リアスの事だから領地で好き勝手した輩を排除しただけと誤魔化しそうだが、それでも一誠は彼女に感謝した。同時にリアス達の協力を活かせなかった自分が情けなく思えた。

落ち込む彼を慰めようとしてリアスは未だ顕現されている龍の腕に触れた。ツツ、と鱗をなぞっていき紋章が眼に映る。見間違いでは無い。

もし自分の記憶が正しければこの神器は龍トウワイズ、ククリテイカルの手では無くもつと上、それも十三しか存在しない、極めれば神をも屠ると讃えられた神滅具ロンギヌスが一角。

古の時代。三大勢力戦争時にライバルである白い龍との争いを繰り広げ、各勢力に甚大な被害を及ぼした伝説のドラゴン。最終的にはその力を恐れた三勢力によって神器に封じられたが千年近くが過ぎ去った現代も恐怖と残酷の代名詞として知られている。子供の頃に両親から教えてもらった詩を思い出した。

——天と称されし二体の龍。純白は妬み、紅蓮は憂う。未来永劫を神檻で過ごさず。理を喰らいし二龍は何時の日か災厄をもたらさん。

「……………まさか、赤龍帝に出会うなんてね」

「赤龍帝？」

聞き慣れない単語に一誠は首を傾げた。確かに格好いいが自分の神器とどう関係があるのか疑問に思える。しかしレイナーレが赤龍帝に反応したのを彼は見逃さなかった。ありえないと呟く彼女にリアスは語る。

「これは龍トウワイス・クリテイカルの手では無いわ。神滅具ロンギヌスと呼ばれる神器」

「――ブレステッド・ギア赤龍帝の籠手。人間界単位で十秒毎に所有者の力を倍にしていく、伝説の神器よ」

レイナーレは眼を見開いた。まさか上層部の連絡が当たっていた等思っていなかったのだ。完全に自分のミス、それも巻き返せない致命的な過ちだ。

そんな、と彼女は悔し涙を流す。見下していた人間が自分よりも価値があった事実に耐える事は出来なかった。項垂れるレイナーレの前にリアスは歩み寄る。その手に消滅の魔力を携えて。彼女の味方は誰も居なかった。

消し飛べとリアスは静かに魔力を押し出した。一介の墮天使に過ぎないレイナーレは抗う事も悲鳴すらも許されずその身体を徐々に消失させていった。そして遂に全て

が消え去った。

埃に混じって鳥のような羽根が舞う。一誠の頭に羽根は降り立った。最初こそ憎しみを込めて掴み取ったが、手の中にあるそれをどうする事も出来ずにズボンのポケットに閉まった。

もう憎悪は無かった。例えばそれが偽りだとしても自分を好きだと言ってくれた彼女を完全に忘れる事はしたくない。せめて自分だけは覚えていよう、と一誠はフリードの方に向き直った。

彼は気付かなかったが、ポケットの中で眠る彼女の羽根は返り血が跳ねたのだろう。赤い線が一筋入れられていた。



レイナーレが消滅した後空から暖かい光が降りてきた。彼女の神器、トワイライト・ヒーリング聖母の微笑だ。だが遅すぎた。神器が返ってきたとしてもフリードはもう死んでいるのだから。銀色の指輪を手にした一誠は彼女の胸に押し込んだ。暖かな神器は元の持ち主と再び

まみえた事を歓喜するかのように吸い込まれていった。

押し黙る彼にリアスはチェスの駒を見せた。紅に塗られた駒は心臓のような鼓動を放っている。

「爵位持ちの悪魔が手に出来る駒の数は合計が十五。女王が一つ、騎士、戦車、僧侶が二つずつ。そして兵士が八つ。僧侶は一つ使っているけれど、私には未だ駒が残っているわ。——このシスターを悪魔に転生させてみる」

リアスはフリードの頭を撫でながら、その胸に駒を置いた。ゆっくりと溶けていき彼女に馴染む。俺の時もこうだったのかと様子を眺める一誠の表情は不安そうだった。駒は成り行きを見守る彼の荒れた心も癒していくように紅い輝きを示した。やがて閉じられた瞼が動く。

復活したのだ。二度と会えないと思っていたフリードがピンク色の頬を取り戻して上半身を起こした。ガクガクと震えながら彼は抱き締めていた。果てていたと思っていた涙が流れる。

お帰りなさい、と一誠は泣いた。ただいまと返して、フリードは笑顔で彼の愛を噛み締めていた。



## l i f e . 1 9 幕

レイナーレとの激闘、フリードとの再会。一誠は登校中に、昨夜繰り広げられた出来事を振り返っていた。結局あの後リアスは彼女を何処かに連れていった。

今晩は休ませてあげなさいとの言葉だし、リアスの事だからフリードを無下に扱いはしないだろうがそれでも不安にはなる。やつと結ばれたのだ。もう二度と離さない。彼は青空を眺めながら駒王学園の校門を潜った。たった一晚の事なのに、こうして学園に来るのが新鮮に思えた。

プロモーション『女王』<sup>クイーン</sup>による全能力の底上げには高い代償を払う必要があり、一誠は現在進行形でそれを味わっていた。身体を酷使し過ぎた影響で全身が筋肉痛になってしまったのである。

リアスが言うには無茶なプロモーションは最悪死に至る可能性もあるらしいので、筋肉痛だけで良かったのだがそれでも脚を動かす事がつらい。

出来るなら今日は家で寝たかったのだが、絶対に来なさいと命令されれば逃亡も出来

ず、こうして一誠はフラフラと歩いていた。

絶対に、と念を押されたがやはりフリード関連だろう。彼女を助ける為とはいえ、教会に大穴を開けてしまったのだ。その件で咎められるかもしれない。

倒れそうになりながら教室に転がり込むと、一誠の疲れきった表情を見たのか女子達も流石に質問責めは浴びせてこなかった。だが遠巻きに注目されているので精神の負担は変わらない。

怒りに燃えながらラリアットをかましてくる悪友二人を軽く沈めてから彼は席に腰を落ち着けた。もう教会の方角は見なかった。

「赤い龍の帝王、ドライブグ……………。そんな大物が俺に宿ったのか」

チェスの世界には幾つか格言があり、その一つとして、——女王の価値は兵士九つ、戦車の価値は兵士五つ、騎士と僧侶の価値は兵士三つ、というものがある。

同様に転生させる者の価値によって消費も異なると朱乃に説明して貰った。彼女曰く、リアスは一誠に兵士の駒を八つ全て使用したらしい。

何となく聞き流しながら、意味を理解した瞬間に彼は驚愕した。客観的に見ても一誠

のポテンシャルは木場と小猫を抜き去り朱乃にも匹敵するからだ。

一般人である為に戦闘能力はゼロに近い彼に何故そこまで消費を求められたのか。疑問に思いながらもリアスは可能性に賭けた。結果が赤龍帝という大当たりだ。確かにそのお陰で今も生きている。フリードも助ける事が出来たが、しかし消費が多かった理由は単純に宿している神器が強力だからに過ぎない。このまま籠手だけに頼り続けは守れる者も失ってしまう。取り敢えず強くなろう、と漠然ながら一誠は目標を立てた。彼女がもう二度と苦しまないように。

そう決心していると気付かない間にチャイムが鳴っていたようで担任が教室に入ってきた。変わらない日常が始まった。

「それでは転校生の紹介をします」

「見た奴の話によると美少女らしいぞ!!」

「それは好機だ!! 是非ともお近づきにならねば!!」

転校生と聞き驚異の復活を遂げる馬鹿二人を他所に担任教師は扉の前に立っている影を呼んだ。入って下さい、と優しい声で告げる山田担任に安心したのか転校生は扉を開けクラスメイト達の前に顔を見せた。

初めての環境に動じる様子も無く転校生の美少女は一直線に歩を進め、黒板に名前を描いていく。

色素が抜け落ちた白髪に雪のような肌、赤い瞳は同じ生物とは思えない程に神秘的だ。騒ぎ立てる一同に混じって口をあんどりと開けている彼を見付けた。子供のよう  
に驚いている一誠に転校生は微笑む。

「この度イタリアから留学して参りました。フリード・セルゼンです！」

「宜しくお願ひしますね！」

「——イツセーさん！」

クスクスと笑う彼女は天使のように綺麗で、そして小悪魔のようだと彼は嬉しそうに眼を細めた。



クラスメイト達に質問責めという名前の洗礼を受けた一誠とフリードは部室にやって来ていた。オカルト研究部のメンバーは全員揃っており部屋も綺麗に飾り付けがなされている。ソファで優雅に脚を組んでいるリアスが二人に声を掛けた。

「今日必ず来て欲しいと命令した理由が解ったかしら？」

「ええ。……………ありがとうございます、リアス部長」

「フリードにはこの学園に通ってもらおう事になったの。イツセーと同じ年だからついでにクラスも貴方と一緒にしたわ。制服や教科書は私からの祝いだし、授業料は特別留学生の特権で免除だから心配は要らないわよ」

またしても彼女の世話になったと思ひながら隣に立つフリードを見た。華やかな駒王学園の制服に身を包む彼女はまた違った可愛さがある。パチンとリアスが指を鳴らした。同時に机の上にケーキ、スコーン、紅茶が立ち並んだ。

「ささやかながら歓迎パーティーを準備してくれていたのである。嬉し涙を流しながら一誠は席に着いた。

彼の横は勿論フリードが占領し美味しそうにスコーンを頬張る。反対の席にはリアスが陣取り、彼にケーキを手渡ししてはフリードと睨み合つた。からかっているのが解るが自分を挟まないで欲しいと嘆息しながら一誠は紅茶を啜つた。木場、小猫、朱乃。最後にはリアスも席を移動させ、仲間達が見守る中で二人は仲良く幸せな時間を楽しんだ。

壁に貼られていたスケッチには満面の笑みのメンバー達が描かれていた。

こうして一人の少年と、一人の少女によって綴られた『非日常』はそつと幕を閉じた。

## l i f e . 2 0 真相

## ▼メインキャラクターファイル

名前 兵藤一誠

種族 転生悪魔（元人間）

性別 男

好物 購買のカレーパン

宝物 メンバー全員を描いたスケッチ

神器 ブーステッド・ギア  
赤龍帝の籠手

備考 レイナーレに殺害され悪魔に転生した元人間。元は凄まじくスケベだったが、フリードとの出会いを切っ掛けに素行を改めて思慮深く冷静な性格に変身を遂げる。愛する女性を救う為に堕天使と激闘を繰り広げた、純粹で真っ直ぐな面が目立つ青年。敢えて弱点を挙げるならフリードの事になると冷静さを失ってしまう点。

一言 当初から原型は出来ていました。人の為に熱くなれる性格は変わっていません

ん。描いている内にスケベでは無くなってしまいました。これはこれで格好いいと思います。

名前 フリード・セルゼン

種族 転生悪魔（元人間）

性別 女

好物 ケーキ

宝物 一誠にプレゼントされた自分の肖像画

神器 トワイライト・ヒーリング  
聖母の微笑

備考 教会を追放され墮天使に拾われた元シスター。過去故に半ば自暴自棄になっている節があり当初は誰も信じていなかったが、見知らぬ自分を助けた一誠の暖かさに触れて少しずつ変わっていった。終盤でレイナーレの手によって殺されてしまうが、悪魔に転生する事で蘇生。愛する人と結ばれた可憐な美少女。一誠曰く天使な外見に似合わず小悪魔な一面もある模様。

一言 間違いなく原作から変化したキャラクターです。以前、鈴科百合子のイラストを見た時に「もしかしてフリードもTSすればこんな美少女になるのか」と考えた事が



発端となり、拙作を執筆しました。内面に関するイメージソースは『のび太と鉄人兵団』のりるるです。

名前 リアス・グレモリー

種族 純血悪魔（グレモリー）

性別 女

好物 紅茶

宝物 修学旅行時に購入した置物

武器 滅びの魔力

備考 駒王町一帯を治めているグレモリー家次期当主にしてオカルト研究部の部長。一誠とフリードの恩人。眷属に対する情愛が深く一誠にあだ名を付けて可愛がつているが、フリードとの仲を見守っている一方でからかう事もある。その為フリードとは睨み合いになる事が多い。一誠の無茶な行動にも眼を瞑る寛大な性格。

一言 余り変わっていないですね。フリードのインパクトが強すぎるせいでしょうか。保護者、纏め役としての面を描けたかなと思います。

名前 レイナーレ

種族 墮天使

性別 女

好物 ホットケーキ

宝物 アザゼルの写真

武器 光の槍

備考 一誠とフリードを殺害した張本人にしてラスボス。告白の返事を躊躇した一誠に激怒する等短気な性格。フリードの神器に眼を付けて暗躍していた。終盤では乗り込んできた一誠と戦うも油断が災いして敗北。部下を全滅させられ絶望した所をリアスに消滅させられた。

一言 挙げるなら命乞いをしなかった事、と言うよりは個人的に命乞いをさせたくありませんでした。苦しませるよりかは、あっさり死なせてあげたかったです。



▼サブタイトルの由来

曙光 記念すべき第一話なので、二人が歩んでいく道を照らす『光』が入っていて、物語の始まりを意味する言葉なので迷いなく決まりました。オレンジ色の夕陽も暗示していたりしています。

無知 一誠はフリードの過去を知らない。同時に、出会ったばかりの二人は互いを全く知らないが故にこれから解り合っていく余地がある、という意味も込めました。

変貌 一誠の変わり様、周囲の評価。崩れていく平穏な日常。何よりも前二話はプロログであり、此処から非日常の歯車は動き出すぞという宣言です。因みに気付いた読者様も居られるかもしれませんが、劇中で担任教師が話していた殺人事件の犯人はドーナシックです。後の展開に対する伏線でした。

処刑 一誠殺害の様子ですね。残酷で惨たらしい。他の案として『転生』等もありましたが、少し捻って此方にしました。

再現 自分としてはこのサブタイトルが気に入っています。ドーナシックの襲撃が一誠には自分を殺しに来る二人目の刺客、一度目の『再現』に思えたからです。よく思いついたと我ながら不思議です。

歓声 女子達の黄色い声、非日常の扉を開いた一誠への歓声。前とは打って変わってストレートです。

背中 悪魔の翼が生えた部位であり、レイナーレに刺された部位でもありません。悪魔としての未来、人間としての過去を意味しています。遊び心です。

成立 契約成立。カラワーナとの戦いの成立。塞翁が馬。良い事があると悪い事もあると暗示してのサブタイトルであります。悪い事が起きた後は………という一種の伏線です。ほぼ解らないと思います。

鱗 初の一文字のサブタイトル。一誠の腕に生えた龍の鱗と、カラワーナの心情である『目から鱗』を意味していると描いていましたが、最終回のサブタイトルだけが一文字なのも違和感があると感じたからでもあります。

所有 一誠、フリード。二人の共通点は神器を所有している点ですから直球で決まりました。

役割 一誠に与えられた『兵士』を指しています。プロモーションの伏線回です。この頃はストリートにしようと考えていました。

視界 ドーナシークの視界をテーブルで覆う作戦。一誠の眼に映ったはぐれ悪魔の最期。自分もそうなってしまうのかという眼に見えない恐怖。そして、一誠とフリードの視界に映った、最も視界に入って欲しく無い人。本当は『邂逅』や『再会』等の候補もありましたが、それでは内容が丸解りなので少し捻りました。

涙 説明するまでもなく、二人が流した涙の事です。

体温 フリードが感じる一誠の体温。それを感じるといふ事はつまり抱き締められている……、という暗示です。

兵士 救出に向かう一誠を遠回しに意味しています。

憤怒 木場と一誠、二人の怒りが爆発しました。ドーナシークの死に際に放った木場の言葉は原作六巻の台詞を敢えてそのまま流用しました。劇中ではフリードに対しての台詞だったので、皮肉のつもりで決定しました。

最期 フリードの最期です。キスシーンを独自に描くという乙女脳な作者でした。

祝福 二人が結ばれた事に対して、作者からお祝いとして決めました。このサブタイトルは前々から既に決定していましたので、こうして無事につけられた事に安堵しています。

幕 かくして非日常シリーズの『この物語』は幕を閉じた……、という意味で完結回にふさわしいと思っっています。前述の文章は某人が死ぬノート漫画のパロディです。最後に第一話から何時かやろうと温めていた一誠のスケッチを登場させる事が出来ました。引き出しに閉まっていると伏線を描いてから長かったです。トリビアですが最後に名前が判明した一誠のクラスを率いる山田担任は……翡翠の髪で巨乳で眼鏡です。

真相 数々の裏設定を格好よく言い換えました。



## ▼後書き

ドーも、ミスター超合金です。遂に完結となりました。応援して下さい。読者の皆様には深く感謝しています

さて、本作品を執筆しようと思った理由は、感想にも描きましたがTS 一方通行のイラストを見て、フリードもこうなるのかと考えた事が発端です。

ただフリードは原作一巻が主な活躍ですが、同じ巻にはヒロインのアーシアちゃんも存在しており、どうしても存在が喰われがちになってしまいます。なのでいつそのこと内面をアーシアにしてしまおう、というので徐々にイメージが出来上がりました。精神面の変化については『大長編ドラえもん のび太の鉄人兵団』に登場するリルルもソースです

後は一章をどれだけ長く描けるのか、というのもテーマでした。本作品では地の文章を極端に多くして台詞をその中に挟み込む形で展開しています。背景描写が多くなっ

てしまい、その分文章が多くなりましたが、これも実験の一つとしてそのまま続けました。大変読みにくかったと思います。申し訳ございません

これから頑張っていくしますので、応援宜しくお願いします